201
H345r
00239294

カマダ

No. 253

唯物論全書

# 歴史論

服部之總著

三笠書房

201.H345a

帝国図書館蔵書之印

国立国会図書館
26.7.10

239294

# はしがき

はじめの考へでは、三篇にわけて、第一篇で歴史哲學の現代的——そして日本的形態を論じ、第二篇で特に歴史理論を頭においていはゆる史學史を扱ひ、第三篇を唯物論史學の方法論にあて、夫々百枚前後でスケッチ風に概論できると考へてゐた。第二篇は晴山見鳥氏に分擔して貰ふこととし、共同著作の實をあげたいと、打合はせも數度行つたうへ、さて私自身第三篇にとりかかつてみると、これは簡單に百枚前後でスケッチ風にといふわけには、ゆきさうもないことが判つた。

といふのも、史學方法論の領域では、唯物論的再構築の仕事が從來ほとんど出來てゐない。史的唯物論の理論についてみるに、ブハーリン批判以來めざましく進行したその理論

的發展は、ほとんどもつぱら世界觀としての契機に於いてであつた。このことは最近における史的唯物論の理論的展開への參與者が殆んど哲學の專門家を中心にしてゐるといふ事實からも、見てとることができるだらう。

これに對して歴史家の立場からする史的唯物論の理論的發展の仕事は、私が見た限りではなほ乏しく、殆んど着手されたばかりである。市民的史學の場合には、修史家は史論を他人まかせに——哲學者に一任したのだが、同じ傾向が唯物論史學の場合にも、今日のところなほ支配してゐるのではあるまいか。といふことが考へられてくると、いつてみればいろはから出直ほして、この問題にぶつかつてゆかねばならない。

これは大へんな仕事で、かつ辛抱のいと仕事である。私ごとき未熟な人間に、短時日で出來ることではない。にもかかはらずともかく何事か試みなければならなかつた。願はくは一片の試論として讀んでいただきたい。

最初の篇別を引こめて、第三篇だつた筈のものを第一篇に据ゑ、とりあへずクロオチエ



の篇別を借用して體裁をととのへたのは、さうした事情に基いてゐる。第二篇は晴山氏の執筆にかかり、これまた豫定された敍述領域の全部を盡しえたわけではない。我々としては、後日よりまとまつたものにしあげる機會を必らずもちたいる考へてゐる。

一九三五・一二・一〇

服部之總

# 目次

はしがき……一
第一篇　歴史記述の理論……一
第一章　最近に於ける唯物論史學再構成のこころみ……一
一　唯物史觀と歴史記述……一
二　ブイコフスキー……九
三　グーコフスキー……二六
四　相川氏……四四
五　歴史記述の唯物論的再構成への途……五一

第二章　歴史記述の對象と方法　……六四
一　歴史記述の對象と主題……六四
二　歴史學の對象と經濟學のの對象……八一
三　經濟史の方法と經濟學の方法……一〇四
第三章　史學分類及諸問題……一二三
一　經濟史……一二三
二　「上部構造」の歴史……一二七
三　普遍史または一般史……一三三
四　特殊歴史……一三三
五　「歴史研究の方法學」……一三五
第二篇　近代歴史哲學の史的批判……一三九
まへがき……一三九



第一章　フランス唯物論的歴史哲學を中心として……一四四
第二章　ドイツ古典哲學的歴史哲學を中心として……一九六
第三章　崩解期歴史哲學……二二三

# 第一篇　歴史記述の理論

## 第一章　最近に於ける唯物論史學再構成のこころみ

### 一　唯物史觀と歴史記述

歴史家の仕事は古來歴史記述にあつた。だが科學としての歴史記述が可能になつたのは史的唯物論の確立以來のことである。エンゲルスが「ブリュメール十八日」第三版序文の中で、「歴史の運動の大法則を最初に發見したものはマルクスその人であつた。すなはちこの法則によれば、一切の歴史上の鬪爭は、よしそれが政治上、宗教上、哲學上、ないしはその他の觀念上の領域に起らうとも、實際においては、それは社會階級の鬪爭の多かれ少なかれ明白な表現にすぎないものであり、そしてこれらの階級の存在と從つてまたその衝

突とは、さらにその經濟狀態の發達程度により、その生産の性質及び方法とこれによつて決定せられる交換の方法とによつて制約せられてゐるものである。この法則は歴史にとつて、かのエネルギー轉換の法則が自然科學に對する意義と同一の意義をもつてゐる。そしてこの法則こそここでも彼に、フランス第二共和政の歴史を理解する鍵を與へたのであつた。彼はいま、この歴史に應用して、彼の法則の試驗を行つた。そして三十三年後の今日にいたつても、我々はこの試驗が燦然たる結果を示してゐると云はなければならぬ」と記してゐるのは、この間の事情を端的に表明したのである。史的唯物論に基く最初の詳細な歴史記述は、マルクスの「フランスに於ける階級闘爭」（一八五〇）である。それは「彼の唯物論的見解によつて、時代史の一片を、與へられた經濟狀態から説明せんとする、マルクスの最初の試みであつた。マニフェストにおいては、この理論は、ごく大ざつぱに全近代史の上に適用され、『新ライン新聞』紙上のマルクスと私との諸論文においては、この理論はつねに同時代の政治上の出來事を説明するために利用せられてゐた。然るに本書



において試みられてゐることは、數年間に亙つての全ヨーロッパにとつて危機的にして、また典型的な發展の、内的な因果關係を指摘すること、すなはち著者の考へでは、政治上の出來事を究局においては、經濟的な原因の作用に還元することであつた」*

＊「フランスに於ける階級闘爭」へのエンゲルス緒言。

史的唯物論に基くことで始めて「科學」たりえた歴史記述のことを、それ以前の思辯的觀念的な歴史記述に對して、マルクスはみづから「現實的な歴史記述（レアーレン・ゲシヒツシュライブング）」＊と呼んだ。もし人々が好んで政治家としての、哲學者としての、或ひは經濟學者としてのマルクスを語り、しかも歴史家としてのマルクスを忘れてゐるなら、非常な忘却といはねばならぬ。いかにもマルクス及びエンゲルスの著作目錄のなかで完備した歴史記述と稱すべきものが占める量は多いとはいへない。それも「フランスに於ける階級闘爭」、「ブリュメール十八日」「新ドイツ建設に際しての强力及び經濟」（未完稿）等いはゆる現代史にぞくするものが大

部分で、十六世紀ドイツに取材した「ドイツ農民闘爭」にしても、それを「全ドイツ史の樞軸」たらしめるべく完全なものに書き換へる仕事は、「豫備的研究は大體完了」（ゾルゲへの手紙）したが遂に成しとげられないでしまつた。それにもかかはらずこれら著作は、いはゆる「現實的な歴史記述」のための見事な規範を與へてをり、マルクス・エンゲルスの諸理論と相まつて歴史記述の學問的性格をあきらかにするためのよきモデルとなつてゐるものである。

＊「經濟學批判序說」第四節

史觀が修史（歴史記述）のための方法となり、修史が史觀のための實證部面となるといふ關係は、凡そ史觀そのものの歴史と共にふるいものであるが、史的唯物論の確立によつて、はじめてこの關係は現實的なものとなつた。神が一切の歴史の原因であり、神と惡魔の闘爭が全人類史の内容であると見る聖アウグスチンの史觀は、人類史を聖書の系譜に從



つてアダムからキリスト死後にいたる六期に分ける彼の修史を産み出すのであるが、この場合史觀と修史との破綻なき關係は現實の歴史に對するおそるべき暴行に於いて成立つにすぎない。その種々なる樣式に從つてマルクスが「いはゆる客觀的歴史記述法。主觀的歴史記述法（道德的その他の）。哲學的歴史記述法」＊と分類したところのふるき修史法は、多かれ少なかれ本質に於いて聖アウグスチン的暴行の上に成り立つ點で「觀念論的歴史記述」に部類されたのである。ついでながらここにいふ「いはゆる客觀的」修史法に關して、ナポレオン三世のクーデターを描いた場合のプルードンの方法が擧げられてゐる。「プルードンのはうはクーデターをこれに先立つ歴史的發展の結果として說明しようと試みては辯護に變じてゐる。しかるに、クーデターの歴史的構成は、いつのまにか、クーデターの英雄の歴史的これに反して私は、いかにフランスに於ける階級闘爭が、凡庸にして滑稽なる一人物をして英雄の役割を演ずることを得しむるやうな情勢と關係をつくりだしたかを指摘する。＊

＊「經濟學批判序說」第四節

＊＊「ブリュメール十八日」へのマルクス序文。

このいはゆる客觀的修史法は、史的唯物論の體制に對する其後の文化反動の線上に沿うて、修史を完全に凡ゆる史觀乃至理論史學から絶緣せしめることを以て修史の理論たらしめるところの「記述學派」史學にまで到達した。この後者についてはいづれあとで觸れることがあらう。例へばブハーリンの「史的唯物論」の中で與へられてゐる歷史理論には、記述學派的原則が密輸入されてをり混交されてゐることを容易に人は見てとることができよう。彼はいふ。「これらの分野（社會諸科學）の各々において、科學はさらに二個の部門に分類される。一の部門は何時何處で何があつたかを研究する——これは歷史學である。例へば社會は、法律の分類において、法律および國家は如何にして發生したか、それの諸形態は如何にして變化していつたかを精密に探究して、詳しく敍述することができる。これは法律の歷史である。しかし、我々はまた法律とは何ぞや、それは如何なる條件の下



に發生し、如何なる條件の下に消滅するか？　それの諸形態は何に依存してゐるか？　といつたやうな一般的問題を研究して、それを解くことができる。これは法律の理論である。かういふ學問を我々は理論科學と名づける。

社會諸科學の中には、社會生活の個々の分野を研究するのでなくて、社會の全生活をその一切の複雜さのままに觀察するところの二個の重要な科學がある。換言すれば、これらの科學はある一列の現象を擇りわけるのではなくて、全體としての社會の全生活を研究し、一切の社會現象を觀察するのである。かういふ科學は一方においては歷史であり、他方においては社會學である。＊

＊「史的唯物論」緒論第五節

すでに今日では全面的に批判濟みな筈の舊ブハーリンをここで引出すことは、意味ないもののやうにも見える。事實また、ひとしく唯物史觀を論講した永田廣志氏の近著を見れ

ば、すでに唯物史觀と歴史に關する下のごとき簡潔にして正確な規定が與へられてゐるのである。

「歴史（科學としての）が唯物史觀と異る點は、それが後者の如く社會發展の一般的合法則性を對象とせず、この一般的合法則性が各々の特殊な社會經濟的構成において採る具體的樣態・特殊形態を問題とするといふことにある。そこで史的唯物論は現實的歴史における無數の偶然性の錯綜の中に必然的なもの、本質的なもの、一般的合法則性を見出し、歴史はかかる必然的なもの、本質的なもの、一般的傾向が現實の社會生活における無數の偶然性の複合の中に如何に具體的にあらはれてゐるかを現像の因果的究明に基いて描寫するものだ、と云ふことが出來る。かくて歴史は社會的現實を悉く描寫することを目的とするのでなく、社會發展における一般的なもの必然的なものに關與する限りにおいての種々の社會現象の經過を對象とする科學である。從つて史的唯物論は歴史の方法であり、歴史は史的唯物論にとつて概括の唯一の現實的地盤である」*



* 永田廣志「唯物史觀講話」第五章

兩者の間にはもはや何らの共通點もない。その代りその間には、ブハーリン批判以來の史的唯物論の理論に關する巨大なる進歩が背景として横はつてゐる。だが、それにもかかはらず、然らば史學じたいの領域において、はたしてこれに照應する理論的展開が營まれてゐるかといふ段になると、疑問なきをえないのである。このことは、殊に最近わがくにに於ける史學的研究の異常な勃興の事實と相まつて、まづ吟味してかかる必要があるものと思はれる。

## 二　ブイコフスキー

ブハーリン理論の全面的批判が開始されて以後、史學じたいを扱つた著書、ないし論文で我が國に紹介されてゐるもののうち、ブイコフスキーの「歴史研究の方法學」は唯一の

まとまつたものであるが、本書はその書題のごとく「歴史の方法論」から區別されたところの「歴史研究の技術または方法學」にもつぱら捧げられてゐるものである。兩者の關係について彼はいふ。

「史的唯物論の理論は歴史學の方法論である。史的唯物論の理論によつて樹立される研究方法は、歴史的過程自體の特性によつて制約されてゐる。しかし歴史家は、當該歴史的事件の紀念物によつて反映された歴史的過程を取扱ふ。これらの記念物は、研究の特殊な技術的方法の總體を制約するところの、その特別の特殊性を持つてゐる。史的唯物論はこの方法を取扱ふことはできぬ、何故なら歴史的紀念物の特殊性は、もつぱら歴史の方法論の對象を構成するところの、歴史的過程の合則性に對して直接の關係をもつてゐないからである。歴史研究の方法は、嚴密な意味で科學的知識の獨立部門ではないやうな科學的原理なのである。それが特に研究の技術的方法を取扱ふかぎりに於いて、我々はそれを、歴史學の方法論と區別して、歴史研究の技術的方法論と呼ぶことができる。この意味においてそれは補助的な歴史的原則と呼ばれ且つ廣義に理解される史的唯物論の理論の一部を構成することができる。正にこの原則の問題こそ以下の全敍述の對象となるであろう」*



* 西雅雄譯「史學概論」昭和九年、二九頁、原書名「歴史研究の方法學」、レニングラード一九三一年。

この論述に再吟味を必要とする點はないであらうか？

ブイコフスキーのいはゆる「歴史研究の技術的方法學」は第一部「歴史研究の技術」に於いて「史料の概念」「史料の基本的集團」「研究に際して史料を吸收する仕方について」以下いはゆる史料學が扱はれてをり、第二部「歴史的批判」の場所では史料批判學が論じられてゐるのであるが、一見して知られるやうにベルンハイムの「史的方法教本」* 以來いはゆる史料學派（記述學派）的史學方法論の準則となつてゐるものの線上にある。この謂は單に外形上の相似に基くものでないことはいづれあきらかにするが、ベルンハイムがその方法學の篇別を史料學・史料批判・解釋・表現の四大部に分つたのは決して偶然では

なく、史料學派＝記述學派としての本質に基いてゐるものであつたのである。

＊ Bernheim, Lehrbuch der historischen Methode. 1889 ・これをベルンハイム自ら簡約した「史學入門」Einleitung in die Geschichtswissenschaft の一九二〇年伯林改訂版の邦譯が岩波史學叢書第一篇として出版されひろく行はれてゐる。坂口昂、小野鐵二共譯「歴史とは何ぞや」大正十一年。尙最新改訂版に基く改譯版が今年岩波文庫から出てゐる。この「史學入門」のロシヤ譯のことが、「注意に値する」ものとしてブイコフスキー「序言」中に指摘されてゐるのは偶然ではない。

ベルンハイムが一方で歴史（歴史記述）を定義してとにもかくにも「一の科學と名づける。何となれば、歴史は或る一定の事實領域をば因果關係をつけて認識すべきであるからだ」と述べてゐるからといつて何ら驚くにはあたらない。蓋し彼の史學の「科學的性質」たるや、「唯物史觀派の抱く考へ」からは最も遠ざかつたところの「價値に關係さした心的＝物的因果連絡に於いて」「人間の發展の諸事實を究明し且つ表現する」にあつたから



ら。＊ベルンハイムに較べたら、「歴史は何ら科學ではない」と敢て書いたマイヤーのはうがよつぽど正直であり率直である。

「歴史は何らの體系的な科學ではない。歴史の職能は、いつか一度現實世界に起つた事變の經過を、究明し表現敍述することである。隨つて、個々の歴史家がそれぞれにどんな特殊の問題を立て得るにしても、歴史はいかなる場合でも、個體の限りなき多種多樣といふことから、決して離れることができない。」

「實際、多年の歴史研究に於いて、私自身、未だ嘗て歴史法則を發見したことが無く、又誰かほかの人の研究に於いても歴史法則は見當らない。」＊＊

率直と圓曲との差異はあるが、兩者とも同一の骨の髓までの史料學派＝記述學派たる點には何の變りもない。その證據には、とにもかくにも歴史の「科學的性質」を認めたはずのベルンハイムは、ひとたびその本領とする「歴史方法論」の領域に入るや、すでに「歴史の職能はいつか一度現實世界に起つた事變の經過を究明し表現敍述することである」と

いふ率直なマイヤーの提言を、すでに最も率直な仕方で方法化してゐるのである！

＊　前出「歴史とは何ぞや」第一章第三節

＊＊　「歴史の理論及方法」岩波「史學叢書」第五篇。三頁及六六頁。本書は Edward Mayer, Zur Theorie und Methodik der Geschichte. (Kleine Schriften, 1910) の邦譯である。

一、「史料學」(Quellenkunde 又は Heuristik) なるものは史料蒐集の方法であり、直接的觀察や思出、報告（傳承）、遺物等もろもろの史料源泉の分類と性格づけがそこで行はれる。「史料保存場所は圖書館・記錄文庫・博物館である」といふ、この篇の終りにちかい一句を記憶せよ。

二、「史料批判」(Quellenkritik) とはかくて蒐められた諸資料の「事項の事實性を決定」する方法である。何よりまづ、圖書館・記錄文庫・博物館等についてかき蒐められた雜多な諸史料を、「證據力ありとして許さるるや否や？」等々と自問しつつ經驗的に「選り分け」、「更に利用しうるやう整頓する」――これがいはゆる「外的批判」それが濟むと



今度はおもむろに「證據の內面的價値・證據力を確定し、かつ諸證據を相互によつて對決し、相互に價値を較量する」いはゆる「內的批判」。そして最後に「主題・時および場所による諸事項の配列」――これが「批判」の「最後の職能である」。

三、「解釋」(Auffassung 又は Interpretation) とは、「諸ろの史料證據をば、それが立つてゐる廣い狹いの關聯の意味で、解說すること」で、その場合何より注意すべきは餘事にあらず、「モルガンやエンゲルスの著作及びベーベルの婦人と社會主義」が陷つてゐるやうな「個々の觀察を見當ちがひに普遍化する誤謬」これである！　「解釋」は「客觀的把捉」(Objektive Auffassung) たらねばならぬ。客觀的把捉とは「關聯の把捉」にほかならぬ云々。

（マルクスの分類における「客觀的歴史記述」につき想起せよ）。

四、「表現」(Darstellung) とは――要するにどうでもいいことである。

何故なら、すでに見たごとき史料學――史料――批判――解釋の操作と順序を經ること

によつて、はじめに圖書館・記錄文庫及び博物館からむやみやたらに蒐められた筈の諸資料は、いつのまにか「客觀的」に、「關聯の把捉」としての自己表現にまで到達してゐたからである。だから、「表現は、ただ史學の作業手段としてのみ考察される、すなはち、研究の結果に、その目的相應な表現を與へるための手段として見られる」。強つて云へば、明鏡止水が要諦である。「主題そのものから、內的な合目的性を以て自發する鹽梅になつて出來てこなければならない」。表現における黨派的態度は、「表現」論の大部分を費してせつに戒飭さるるところである。思ふにクロオチェが諷して以て「外交的」と呼んだランケの骨法こそ、かくのごとき要請における「表現」の悟道であらう。

ベルンハイムの「方法學」とはまさにかくのごときものであつたからこそ、全記述學派＝史料學派のための方法學たりえたのである。これに對してはクロオチェ以上にほがらかな言葉できめつける術はあるまい。



「あの文獻學者たちの單純な確信、すなはち彼等の圖書館・記錄庫・博物館の中に歷史を收藏してゐる——あたかも、千一夜物語に出てくる精靈が壓搾された煙となつて一個の壺の中にとぢこめられてあるやうに——とする單純な確信……は、單なる事物を以て、傳說物語及び文書（空虛な物語と枯死した文書）を以て築かるべき一の歷史の觀念を發生させてゐる。これはすなはち文獻學的歷史と呼ばるべきものの場合である。私は敢て事實と云はずして觀念といふ。そのわけは、如何なる努力といかなる勤勉とを以てするも外的事物の上に歷史を築くことはもとより不可能である。新たに磨きをかけ、色々に區分けし、結果を改め、配列を變へたところで、記錄は依然として記錄でしかない。云ひかへれば空虛な敍述でしかない」。＊

また、「事實の選擇」といふ重要な問題にふれてゐる場所で

「すべて、博識家も文獻言語學者も、選擇する。（けれども、クロオチェによれば、凡そ「選擇」のための論理的基準なるものは存しない）。なぜならここ（選擇）にあつては我

我は實踐的探求の中を動いて、科學的探求の中を動いてないから。まことに、この論理的規準の缺除こそは迷論のもとである。そしてこの迷論はあの暗愚の蒐集業者の上に暴威をふるつて、さうして彼等はすべては有益たりうるといふ正しい主張のもとにすべてを保存しようとする不正を敢てする。そして古着や珍物やよろづ切端しを山とあつめ、これを眺めまた嫉妬的な愛撫をもつてみはりまもることに身をやつす。」**

「選擇」の原理を且つ歷史構築の全原理を「生の哲學」に見出すことで、歷史と哲學の幾久しき乖離を「新らしき」結合にもたらしたと信じた愛すべきわがベネデト・クロオチェ。さしあたり彼をこそ選擇して、一切の記述學派の性格が——口上いかにもつともらしく「法則」を云ひ、「科學」を云ひ、その探究を誓約しようと實は「古着や珍物や、よろづ切端しを山とあつめる」モノマニアであると、唱和してをかう。そしてこのモノマニアの歷史的、社會的役割につき「表現」すべく・かの史料——批判——解釋のやかましい手續きを人は必要とするであらうか。



* 羽仁五郎譯「歷史敍述の理論及び歷史」二七—八頁

** 同譯書一四七頁

さて、ブイコフスキー「歷史研究の方法學」に立還へるためには、すくなくとも、ベルンハイムの方法學に關するさきに述べただけの批判が、あらかじめ必要であつた。もとより歷史家の仕事が運命的に「史料」なるものから離れられない限り、史料を處理する技術に關する舊史學の遺產に對しては充分の關心をもつてこれを繼承する必要がある。だがそのことはただ劣らず充分の關心を以てそれを批判することによつてのみなしとげられる。すでに見たごとくベルンハイムの史料處理學は構成じたいから細部にいたるまで記述學派的歷史方法論によつて浸透されてをり、むしろそれは記述學派的歷史方法論の實體上の裸身であつた。その中では、(主觀的には)、歷史家一般が直面するところのあらゆる史料の處理法に就て總括的に論じられてゐる筈であるのに、マルクス主義史家ならばただちに當面しなければならぬやうな重要「史料」部門——たとへば勞働手段の特殊な又は一般的な

體系としての「技術」について彼は一語でも費してゐただらうか？「すでに亡び去つた動物種屬の身體粗織を認識するにはその遺骨の構造を知ることが重要であるが、それと同樣に勞働要具の遺物を知ることは、既往における經濟的社會構成を判斷する上に重要な手懸りとなる」といふ「資本論」の言葉はあまりにも有名であるが、ところでブイコフスキーが與へてゐる「史料」分類の第三部門「事物的記念物」――「考古學的發掘によつて得られる種々の物件、及び地表上に見出されうる過去のあらゆる他の事物的遺物」＊の場所にも、ベルンハイムと大同小異の「古い都市の廢墟、墳墓、家屋、門、墓石、衣服、什器等」が指示されてゐるにすぎないのは、單に物足りぬでは濟まされまい。兩者の史料分類學じたいについて云へば、本質上まつたく同一のものであつた。例へば法律的記念物をベルンハイムは「遺物」の部門に編入するが「穩當でない」。そこでブイコフスキーはこれを「文書的傳承」の集團に配置しなほすくらゐのものである。＊＊



ベルンハイム

一、直接的觀察及び思出
二、報告（傳承）
　A口　碑
　B文學による傳承
　C繪畫による傳承
三、遺物
　A狹義の殘留
　B記念物

ブイコフスキー

一、口碑傳承
二、文書的傳承
三、事物的記念物及び繪畫による傳承
四、殘存物

＊ブイコフスキー前揭譯書四三頁

＊＊　同書三六頁

もとよりこの種の整理そのことは、史料に對する者にとつて決して不必要な事柄ではない。だがベルンハイムにとつての「史料」はすでにクロオチェが揶揄したごとくそれじたいの中に「歷史」がひそむところの「精靈の壺」を意味してゐた。そして彼の史料分類は、この神祕の壺の中から歷史が原稿用紙の上に自己展開してゆくための第一階梯であり、「批

判」は第二楷梯であり、「解釋」及び「表現」は最終楷梯であつた。かかる場合に、人あつて若しかの「解釋」及び「表現」の場所に「歴史學の方法論」としての史的唯物論を置きかへることで、容易にベルンハイム以來の「史料學」と「史料批判」學を救濟し繼承しうると考へたとすれば、事態は全く容易ではない。ブイコフスキーの「史學概論」は、我我の見るところでは、本質上この種の折衷主義の線上を彷徨してゐると思はれる。

この折衷を合理化すべくブイコフスキーはあらゆる苦心を拂つてゐる。彼は一方で、たとへば「すべてこれらの方法――いはゆる『記念物の最終的綜合的批判』の五つの方法を指す――は、本來、史的唯物論の理論がその根柢たるところの同一の方法の變種である」*と云ふ場合、史料批判學がその隅々まで「歴史の方法論」としての史的唯物論によつて貫かれてゐるべきことを正しく要請してゐる。いはゆる「歴史研究の技術的方法學」が「廣義に理解される史的唯物論の理論の一部を構成することができる」といふ場合も同樣である。だが、それにも拘はらず他方で――しかもこの同じ言葉が聞かれてゐる同一のパラグ



ラフで、「史的唯物論はこの方法を取扱ふことはできぬ、なぜなら歴史的記念物の特殊性は、もつぱら歴史の方法論（史的唯物論）の對象を構成するところの、歴史的過程の合則性に對して直接の關係をもつてゐないからである。歴史研究の方法は、嚴密な意味で科學的知識の獨立部門ではないやうな科學的原理なのである」（前出）といふ場合、彼の要請に對する彼の無力を吐露したものといはざるを得なからう。

＊　前掲譯書、一八四頁。

このことはまた、彼にあつては――或ひは、彼に云はせれば他の人々にあつては――史的唯物論の理論が何等か固定的・形式的なものであるかの如く觀念されてゐることと照應する。

「歴史研究の急速な遂行の一般的な且つ全く必然的な前提たるものは、歴史學の方法論および歴史研究の技術的方法論（方法）の把握である。上述のことに照應して、問題は、

特に歴史學の方法論に關しては、形式的な知識にあるのではないことを記憶することが必要だ。史的唯物論の理論の領域における形式的知識では不足であり、そしてこの知識を物神崇拜すべきではない。例へば、ブルジョア歴史家は決して史的唯物論の方法を把握しえないであらう。同じことは、社會生活から遊離した『ソヴェート』歴史家についてもいはるべきである。かくして、歴史學の方法論の把握なく且つその把握への當然の前提なしに史的唯物論の技術を把握することは、何ものをも與へない。……卽ち、歴史研究のすべての方法の完全な把握は史料に關する實際的な仕事の過程においてのみ到來する」*

＊　前掲譯書六五頁。

ここでは實に澤山のもやもやが吐露されてゐる。原書に直接に就くための便宜がないためかも知れぬが、決してそれだけではあるまい。あるひは彼は、社會生活から遊離してゐるソヴェート史家は、ブルジョア史家同樣に、史的唯物論の理論を形式的に理解し物神崇



拜してゐると云はうとしたのかもしれない――併し、史的唯物論の理論は歴史家の史料を處理する實際的な仕事の過程においてのみ、歴史記述のための技術學にまで發展しうるものであり、彼はこの仕事を果しつつあるのであると。假にさうだとしても、彼がこの事で現實に示してゐるところの「技術的方法學」は、彼の要請を裏切つてあまりにも史的唯物論の理論から獨立してをり、それだけ多く記述學派的歴史方法論に接近してゐる、といふ事實はこれを如何ともすることができない。もとよりブイコフスキーの「技術學」はベルンハイムのそれと全然同一のものではありえない。ベルンハイム的方法學に對する批判の方向に於いて、彼が多少とも積極性を示してをり、マルクス主義的課題に近づいてゐる諸點については後で觸れることがあらう。

さて、ブイコフスキー自身の成果がいかやうにもあれ、史的唯物論の理論の史學技術學への深化＝具體化といふ彼の主題の意義については、何人もこれを認めるにちがひない。しからば、ブイコフスキーによつて非難されてゐる一部ソヴェート史家たちにあつては、

はたしてかかる主題の意義が理解されてをらず、その解決のための努力が試みられてゐないのであらうか。さうではない。同じくわがくにに紹介されてゐるソヴェート史家の歴史理論のうちから、つぎに私はグーコフスキーのもの*を檢討してみる。彼は同じ主題を、ブイコフスキーとは殆んど異つた仕方で、解決せんと試みてゐる。

* グーコフスキー「歴史科學とは何ぞや」。「歴史科學」昭和七年創刊號譯載。原著はグーコフスキー・トラハテンベルグ共著「前資本主義社會史」（モスクワ、一九三一年）序論。

## 三　グーコフスキー

「社會學は何らかの仕方で歴史に對立するものだ、といふ風に考へてはならない。社會學なくしては何らの科學も――歴史も存し得ない。何故なら一切の歴史家の任務は、まさに、所與の具體的歴史狀態の事中一般的社會學的法則を發見するといふ點にあるのだから。歴史家は單に材料を蒐集し記述するものであるが、社會學者はこれらの材料を一般化して、



社會發展に於ける合則性を確認するものであると考へるならば、大なる誤認であらう。」*

といふ場合のグーコフスキーは、一見「理論」と「歴史」・史的唯物論と歴史記述に關する舊ブハーリン的定式の批判に出發するもののごとくである。

かくてグーコフスキーは科學としての歴史記述の再建に立向ふ。あらゆる歴史記述はその科學性を明瞭に規定されるべく、彼の「歴史科學」の體系に包攝される。

歴史諸科學、あるひはより適確に云へば單一の歴史科學のありとあらゆる諸分枝が限りなく多數に存在してゐる。これらのうち若干のものは、一定の諸問題（階級鬪爭史・宗教史・文學史・勞働組合運動史・農業技術史その他等々）の範圍に、またある一定の時代（パリ・コンミユン時代、十九世紀、十月革命以後その他）に、最後に一定の地理的（あるひは政治的）境界（ドイツ・アジア・モスクワ地方・ロシア・ソヴェート同盟その他）に限られてゐる。

だからたとへば、歴史科學の若干の分枝のつぎのやうな命名が生ずるのである。すなは

ち「十九世紀における西歐の階級闘爭の歴史」、「フランスにおける戰後の勞働運動史」、「十八世紀のロシアにおける農奴經濟史」その他等々。

これら一切の實例においては、歴史は、個々の、全く一定の（具體的な）現象及び事件について語る。または約言すれば、地理學および年代學の範圍に限定しつつ、或る主題の研究に從つてゐる。」＊＊（力點原文）

我々はさきに、マルクス・エンゲルスによつて殘された歴史記述として「フランスに於ける階級闘爭」「ルイ・ボナパルトのブリュメール十八日」「ドイツ農民戰爭」等を擧げたが、グーコフスキーの分類に從ふと、これらのものは「地理學および年代學の範圍に限定しつつ或る主題の研究に從ふ」ところの「諸分枝」である。しからばこれらを「諸分枝」として統合するところの「正確にいへば單一の歴史科學」とはいかなるものか。

「單一の歴史科學」の概念は、グーコフスキーの場合、「單一の社會科學」と同義語ではあり得ない。後者は彼にあつてはむしろ「社會學」と呼ばれて、「それのみが歴史を科



學たらしめるところの方法論」の地位に置かれ、**合則性・生産力と生産關係・上部構造・社會經濟構成**等のこれを要するに史的唯物論の基本諸命題が、かくのごとき「方法論」の要約として與へられてゐる。そこで彼がいふところの「歴史科學」の構成要素をさらに求めて、つぎのごとき解答を彼から得ることができるだらう。すなはち、前掲引用文に引續いて、

「だが問題はこれとは違つたものであり得る。歴史はより廣汎な諸任務をも自己の前に提出する。歴史は一定の限られた時代のある一國、または數國のグループの歴史的進路のみならず、人類發展の種々の段階における全人類の歴史的進路をも記さねばならぬ。かやうな場合には、歴史家は歴史の種々の部門によつて供給される材料を利用する。彼は種々の國の歴史から取られた多數の實例を蒐集し、注意して研究する。彼は全系列の個々の場合に反覆される一般的特徴を注意するやうに努める。そしてたとへば資本主義發生の時代における階級闘爭の具體的な歴史的實例の若干數を觀察してしまつた後に、これら一切の

實例の中に或る一般的なものが存在する、といふ結論を作ることができるのである。この時代にはいたるところに農民の、、が增大すること、……勞働者階級が形成されつつあること等を見受けることができる。歷史はこれら一切の一般的特徵を注意し、資本主義發生の時代においては常に階級鬪爭の一定の型が生ずるといふ結論に達するのである。それ故、イギリス或はフランスにおける資本主義發生期の階級鬪爭の具體的歷史だけが問題となり得るのでなく、資本主義發生期の階級鬪爭の一般的形態が問題となり得るのである。かくのごとく廣汎に提起された諸課題は、もはや具體的歷史によつてではなく「社會學」（社會學（オロギア）——文字通りには社會に關する科學のこと）によつて解決され得るものである」**

（力點原文）

* 前揭「歷史科學」創刊號三—四頁。

** 同上 二—三頁

この一聯の論述の中から原著者により力點を附されてゐる場所を引出してみやう。曰く



「單一の歷史科學」——その無限の諸分枝としての「具體的な」歷史記述——これとは異つてより廣汎な任務を課題とするところの・「型」を・「一般的形態」を課題とするところの歷史部門。

ここにおいて彼のいはゆる「單一の歷史科學」なるものの概念は略々あきらかであらう。これら引用文が一切をなすところの彼の序論は「歷史科學の一般的特徵づけ」と題されてをり、この序論をもつところの彼の著書は「前資本主義社會史」と書題されてゐるのであるが、この「前資本主義社會史」こそ、かの「型」又は「一般的形態」を課題とするところの歷史部門であり、「諸分枝」としての歷史記述と共に、「單一なる歷史科學」を構成するところの實體であつた。すなはち

「社會の經濟的發展法則を研究する特殊の科學がある。それは經濟等である。だが經濟學は形成された階級社會のみを研究するものである。しかし階級的構造は社會諸關係の永遠の形態ではない。それ以前に他の諸形態が存在してゐた。もし我々がこれらの前階級的

諸關係と資本主義發展の經過とを闡明しないならば、この資本家的社會の不可避的揚棄へと導く要因を理解することができない。前資本主義的構成の歴史がこの任務をなしとげるこの歴史は人類がいかにして資本主義へ到達したか、資本主義以前にはいかなる諸關係が存在してゐたか、そして何故に色々の社會諸關係が交互に交替したかを物語る」*

* 前掲譯文一―二頁

「經濟學は形成された階級社會のみを研究する」といふ彼の規定はあきらかに間違つてゐるが、それはそれとして、彼の「前資本主義社會史」の構成が資本主義社會に到達するまでの人類社會の一般史の敍述にあつたといふことは、右引用部分からしても、また彼の著書の篇別そのものからも理解することができる。さて、彼の「一般的」歴史科學がかくのごときものであつたとすれば、あたかもそれはブハーリンが「社會の全生活をその一切の複雜さのままに觀察する二個の重要な科學……一方において歴史・他方において社會學」



といふ場合の「歴史」であり、これに對して彼が「諸分枝における」歴史科學のうちに數へあげてゐるところの宗教史文學史等々は、同じくブハーリンが「各科學分野における二個の部門……法律の歴史……法律の理論」といふのに該當しやう。グーコフスキーのせつかくの「單一の歴史科學」の構成が、こんなことに終るのであれば、ブハーリン的圖式主義に對する彼の批判も、相川氏が指適してゐるやうに*、言葉のみといはれても仕方があるまい。

* 川春喜「歴史科學の方法論」二〇頁、相川氏は「社會學は歴史科學の方法論である」といふグーコフスキーの命題に對する批判からこの結論に達してゐる。曰く「教授（グーコフスキー）のいはゆる「社會科學は歴史科學の方法論である」といふ命題は、歴史科學が一の社會科學ではないかの如くに取扱ひ、結局は（彼が批判したやうな）社會科學と歴史科學の（ブルジョア的には「社會學」と「史學」との、又は「經濟原論」と「經濟史」との）對立的分科主義に同意してゐるものに外ならない」

だが、いま一歩すすめて、この一見ブハーリン的史學の構成と同一な彼の單一の「歴史科學」の構成の中に、歴史記述をしてブハーリン的意味における「純粋記述」科學たらしめないで、法則探究に從事するところの獨自の「歴史科學」ならしめるといふ、彼自身の意圖のあるところを探し求めてみやう。一般に史的唯物論の理論を歴史記述の方法論にまで再構成するといふ、當年のソヴェート史家たちの課題を解かんとする一つの試圖が、彼の「歴史科學」論として提示されてゐたのにちがひないのであると見て。

思ふにその試圖は、「全系列の個々の場合に反覆される一般的特徴」・「一般的形態」・「一定の型」を「種々の發展段階における全人類の歴史的進路」の上で究明するといふ新部門の「歴史科學」が個々の歴史記述に對してもつところの關係の中に置かれてゐる。換言すれば、彼がもつぱらその仕事の中に「歴史科學」の展開を試みたところの「前資本主義的構成の歴史」は、個々の歴史記述に對してそれじたい方法論としての地位に置かれる。個々の歴史記述は、「前資本主義的構成の歴史」等の「あらゆる諸分枝」たる關係に置か



れることによつて、「單に材料を蒐集し記述する」前科學的存在から解放され科學としての「歴史科學」に包攝される。「前資本主義の歴史」等は「社會學」（グーコフスキーの語法によれば史的唯物論の事を指してゐる）であると同時に歴史であり、その逆もまた然り。蓋し「かくのごとく廣汎に提起された諸課題は、もはや具體的歴史によつてではなく「社會學」によつて解決されうる」のだから、そこで「前資本主義的構成の歴史」は「社會學」と個々の歴史記述との中間にあり、「社會學」としての史的唯物論を歴史記述の方法にまで具體化するところの「歴史科學」の樞軸部門となる。假りに表示すれば下の如し。

一、「社會學」として史的唯物論

二、「資本主義的構成の歴史」

三、個々の歴史記述

かくて「歴史科學」者グーコフスキーの問題解決は唯物史觀の理論を唯物史觀的一般史の形で再展開することにかかつてゐる（註）。だが、それによつては「歴史家」ブイコフス

キーが自己の課題として個々の歴史記述のための直接的具體的方法――いはゆる歴史研究の技術學にまでの史的唯物論の具體化といふ使命は結局依然としてとり殘されたままに終る。そこで後者は前者のことを、史的唯物論への形式的知識を以て滿足し史學方法論を具體的に把握しようとしない「社會生活から遊離せる」一部史家たちと呼んだのであらう。蓋しこの場合の「社會生活」とは「資料に關する實際的な仕事の過程」にもつぱら從事するていの「歴史家」としての生活のことであるにちがいないけれども。

註　「前資本主義社會史」の篇別は次のごときものである。邦譯が無いから掲出してをく。

序（ペー・クーシユネル）

序說（アー・グーコフスキー）

歴史科學の一般的特徵づけ

資料

一、前階級社會（原始時代）（オー・トラハテンベルグ）

（1）動物から人間へ



（2）原人

（3）生產經濟への移行

（4）現代における原始社會の殘存物

（5）原始的心理について

二、前階級社會（氏族制度の時代）（アー・グーコフスキー）

（6）生產經濟の强化

（7）氏族組織

（8）氏族制度の殘存物

三、階級社會の起源とアジア的および奴隷制的生產樣式の問題（アー・グーコフスキー）

（9）社會の階級分化の前提と經路

（10）アジア的生產樣式と古代の大河川文化

（11）奴隷制的生產樣式と地中海の略史

四、封建制（アー・グーコフスキー）

（12）ヨーロッパ封建制の起源

(13) 封建社會の經濟制度
(14) 封建社會の政治制度とイデオロギー
五、封建時代における都市（アー・グーコフスキー）
(15) 封建都市における手工業と商業の發達
(16) 手工業者と商人の組織
六、封建的關係の解體および資本主義的關係の生誕の時代（オー・トラハテンベルグ）
(17) 時代の一般的特徴づけ
(18) 商業の發達
(19) 貨幣と信用
(20) 大商業の組織
七、工業（オー・トラハテンベルグ）
(21) ツンフト的手工業の解體
(22) 資本主義的家内生産
(23) マニュファクチュアと鑛業



八、農業制度と農民運動（オー・トラハテンベルグ）
(24) 農業制度の一般的特徴づけ
(25) イギリスにおける農業制度と農民の運動
(26) フランスにおける農業制度と農民の運動
(27) ドイツにおける農業制度と農民の運動
(28) ロシヤにおける農業制度と農民の狀態
九、封建制の解體と資本主義制度の生誕の時代における政治制度（アー・グーコフスキー）
(29) 民族國家の形成
(30) 絶對主義
(31) 商業國家
一〇、初期ブルジョア革命（アー・グーコフスキー）
(32) 十六世紀のオランダにおける革命
(33) 十七世紀のイギリス大革命
一一、ブルジョア・イデオロギーの初期形態（アー・グーコフスキー）

(34) 都市文化と生活樣式
一二、産業資本の時代への移行（アー・グーコフスキー）
(35) いはゆる資本の原始的蓄積の過程
(36) 産業革命
一三、結論（アー・グーコフスキー）
(37) 本教科書の意義
(38) 非資本主義的發展經路の問題

## 四　相川氏

相川春喜氏の近著「歴史科學の方法論」は、唯物史觀と歴史記述の問題に關するグーコフスキー的設問に一つの解決を與へんとしてゐる點で、また就中、羽仁五郎氏の先年の論著以後の時期に於いて、我國でこの方面の理論的課題を取扱つた殆ど唯一のものとして、注目すべき文獻である。以下もつぱら本書「首篇・歴史科學と史觀」を對象とする。



相川氏はあらかじめ「歴史科學」なる概念を、夫々對象を限定しつつ三種に區別する。「最も廣汎な意義における歴史科學」、「より狹義における歴史科學」及び「限義における」すなはち「限定されたる意義における歴史科學」。この各々の概念に對する相川氏自身の定義の引用を割愛する代りに、最後のものを除いた二種の概念に就いては、マルクス・エンゲルス自身の用語法に從つて人々が知る筈である所以を指示してをかう。すなはち氏のいはゆる最廣義における歴史科學とは、「ドイッチェ・イデオロギー」リヤザノフ版に云ふところの「唯一の科學、歴史の科學を知るのみ。歴史は二つの方面から見られて自然の歴史と人間の歴史とに區分されることができる云々」に該當する場合であらう。このときは「自然の歴史、いはゆる自然科學」も、「人間の歴史」もまた「この歴史の諸側面にすぎないイデオロギー」も、「唯一の科學・歴史の科學」の領域であつた。

つぎに氏の「より狹義における」歴史科學とは、右にいふ「人間の歴史」を特に對象とする場合であり、氏によれば「經濟學批判序説」に、「各々の歴史的社會的科學の場合と

同じく經濟的範疇の道程に於ても云々」といふ場合の「歴史的社會的科學」の概念である とされてゐる。この場合「より狹義に於ける歴史科學」はひろく用ゐられてゐる「社會諸科學」と同義語であらう。

最後に「限義の」歴史科學――すでにマルクス・エンゲルスの古典的語法には見出されないこの耳新らしい概念を以て、相川氏は一方では、從前一切の歴史記述およびその學としてのいはゆる史學の概念に對應させると共に、他方では、從前の史學が科學としてのマルキシズムの中に揚棄されつつ存續する場合の科學部門を表明せんとするもののやうだ。殊にこの後者の意圖において、「歴史科學」に關するグーコフスキー的設問を直接相川氏は繼承してゐると見られる。

まづ「限義の」歴史科學なる概念のマルクス的規定に到達すべく下の如きグーコフスキー批判から氏は出發する。すなはち、グーコフスキーが「『廣義の經濟學』の對象を『階級社會のみ』に局限し、歴史科學のために『前階級社會』といふ獨自の『專有領域』を『占



取』する繩張的な誤謬」を冒してゐるのは「明かに反マルクス的である。これは『歴史科學』の名において『經濟學』のマルクス的對象規定を、その方法的基礎と共に歪曲するもので、例へば、所有といふ經濟的範疇の史的性質を見ただけで明かなことだ。結局は、前階級社會（卽ち原始共產主義社會）を經濟的構造でないかの如くいふ素朴な方法論上の誤謬でしかない」＊そして氏は下の如き一應の解答に到達する。

「『限義の』歴史科學とは『廣義の』經濟學に外ならないか？『然り！』と著者は先づ答へなければならない」＊＊。「正しくその方法一般のみならず、その對象も同一であるが故に、兩者は先づ同一者として規定されねばならない」。＊＊＊

＊　相川春喜「歴史科學の方法論」一七頁

＊＊　同書　一九頁

＊＊＊　同書　二〇頁

グーコフスキーの課題が實は史的唯物論の理論を唯物史觀的一般史の形で再展開するこ

とにかかつてゐたとすれば（參照前節末註）、相川氏のグーコフスキー的「歴史科學」に對する批判は、この場合、當つてゐない。グーコフスキーの一般的歴史科學は、理論的にも著作「前資本主義社會史」の上でも「前階級社會」といふ獨自の「專有領域」を「占取」してはゐないからである。それにも拘はらず相川氏の到達した歸結はグーコフスキーの一般的歴史科學の要請にほぼ合致せんとするもののやうである。蓋し相川氏の「歴史科學」は「廣義の經濟學」と、方法も對象も同一であり兩者は「先づ」同一者として規定されねばならぬのであるから。

もつぱら資本主義的生産樣式とそれに對應する生産及び交換關係を研究するところの「狹義の」經濟學と、あらゆる、卽ち、「種々なる人間諸社會がその裡に生産し、交換しこれに應じて生産物を分配し來つた諸條件及び諸形態の學」としての「廣義の」經濟學との關係は、「反デューリング論」第二篇第一節で與へられてゐるところで、それに基く相川氏の展開（一一——一七頁）はいまここで觸れない。相川氏自身によつて與へられてゐる



廣義の經濟學の定義づけ——「前資本主義的社會構造の歴史的段階に關する、夫々の特殊な諸條件・諸形態の分析的研究の具體的指針のみでなく正に具體的分析＝敍述そのもの*」といふ規定の吟味につけて、後で觸れる場合があらう。いづれにせよ、グーコフスキーの「歴史科學」における一般的方法的部門は、「前資本主義社會史」の篇別が語つてゐるやうに人類社會の始源段階から初期資本主義の發生段階にいたるもろもろの社會經濟的構造の必然的繼起の普遍史であつた。相川氏の「廣義の經濟學」にあつてもまた、種々なるグーコフスキー批判にも拘はらず、まさに同似のものが要請されてゐる。そして相川氏の「歴史科學」とは、かくのごとき「廣義の」經濟學と「先づ」同一者として規定されねばならない。

* 相川氏前掲書　一二頁。

「だがその次に、吾々は本來同一であるところの、この「廣義の」經濟學が、何故に

「限義の」歴史科學と、その名稱を異にするかを、從つてまた、本質的にその科學の特質區別を、果さなければならない」*

とこで相川氏は、いはゆる「限義の」歴史科學なる概念が、從前一切の歴史記述及びその學としての所云「史學」の概念に對應するものであることを明らかにする。しかも、かくのごとき對應そのものの中に、廣義の經濟學と限義の歴史科學との差別性の祕密があつたのだと說明される。換言すれば、「歴史科學」(從つて從前一切の史學)なるものが何らか「經濟學」から對象及び方法に於いて異つたものと見えるのは、マルクス以前における學問的制約性の結果であり、科學としてのマルキシズムの體制にあつては、かくの如き差異性は揚棄さるべきである、といふ氏の主張が認められる。ややくわしく氏に就いて知らう。

「マルクス主義全學說體系は一の「宗派(セクト)」でも「學派(シュール)」でもなく、「……當時の科學の全成果に對する完全な通曉を基礎としてその證明を示した」ものであり、『科學發展の大



道に生れた』ものである。

マルクス經濟學についていへば、それはフィジオクラシーから正統派までの近代經濟學の「自己批判者」であり、「直接的相續者」であり、且つ批判的揚棄者である。

他方これを歴史科學に卽していふならば、ヴイコからヘーゲルまでの「歴史哲學」の就中革命的辯證法の繼承的揚棄者たる唯物論的史觀の創建と Klassenkampf に關するブルジョア的及びプロレタリア的 Umwaelzung の主觀的(階級的)並に客觀的(「生活的」)諸條件に關する、唯物論的歴史敍述の「正統的」建設とを具有してゐたのである。

「資本論」の全內容は、經濟學的著作でもあり、哲學的著作でもあるが、同時に極めて精細且つ嚴密な分析に立つ歴史的敍述をもつところの歴史科學的著作でもある。それは資本の原始蓄積劃期、マニュファクチュア時代、產業革命、產業資本確立期の資本主義的發展過程の記敍をもつのみではなく、封建制とその崩壞過程の歴史的敍述をもつばかりでなく、奴隷制・原始共同體社會の若干の敍述をも有つており、當時の著名な「史家」の研究

成果をも「批判的に」反映せしめられてゐる。

ブルジョア的經濟學及び歴史科學の、直接的且つ內在的「自己批判者」こそが、全社會科學史の公道を往くところのプロレタリア的經濟學であり、歴史科學であり、且つかるものとして獨自の、ヨリ高き段階にある科學であるといふ立場こそ、この經濟學と歴史科學との夫々の相對的に獨立した史的特質と任務を明かにするものであらう。

經濟學的敍述と歴史科學的敍述とが、その篇別構成において、その個々の敍述樣式において、從つてまた研究上の「技術的な」操作においても、著しく對蹠的にみえるのは、かかる學史的地盤のために制約されてゐるからである。經濟學の篇成及び記述が勝れて範疇的であり理論的であるのに對し、歴史科學の篇別及び記述が著しく過程的であり材料的であるのは、近代的科學一般の社會的現實的必要が制約してゐるとはいへ、明かに歴史科學の跛行を示すものに外ならない。」**

「かくて經濟學は範疇であるが故に具體的である。その法則的意義はマルクスにより定



立せられた。歴史科學はこの點で著しく立ちをくれ、その篇成及び記述において極めて、自然成長的」であり、科學的には逆の、單なる年代的順序に從つた歴史敍述をもつて滿足せしめられた。それは單に過程的であり、單に材料的記述に過ぎなかつたではないか。」***

「『狹義の經濟學』を確立し、よつて以て『廣義の經濟學』の向後の研究上の具體的指針と若干の古典的敍述を與へた偉大なる創設者たちが、謙虛な言葉で『今後に打建てらるべきもの』と遺言した（遺言者の一人はしかも例へば『家族・私有財産・國家の起源』の著者である）『廣義の經濟學』の確立・發展・具體化こそは、同時に歴史科學創設の一の重要な方面である。」****（力點中・は相川氏、は引用者）

* 相川氏前掲書 二〇頁

** 同書 二一—二二頁

*** 同書 二三頁

＊＊＊＊　同書　二五頁

ここに於いて我々は、科學としての歴史記述は「歴史家＝マルクス主義者」にあつては「廣義の經濟學」たるべきものだ――といふ前人未踏の提言に接したのであらうか？もしも前記引用文中の最後の言葉たる「歴史科學創設の一の重要な方面」といふ反省が與へられてをらず、また著者みづからによりこの重要な方面の前進のために捧げられたところの全巻のアルバイトが「歴史科學の方法論」と特に書題されてゐなかつたとしたら、すくなくとも相川氏自身の「歴史論」としてならば、殆んど我々は右の如き提言に接してゐたといはねばなるまい。しかし氏にあつては、歴史家本來の任務たるもろもろの歴史記述そのことが忘失されてをり、私がはじめに擧げたやうな例へば「ドイツ農民戰爭」や「ブリュメール十八日」等が「歴史家＝マルクス主義者」に對して保有するところの古典的・標準的意義の重要さが認められてゐないやうに思はれる。



この點でわが相川氏は、ブイコフスキーが批評した場合のグーコフスキー的傾向以上のものであつた。だがそのことは相川氏の著書が全體としてグーコフスキー等の「前資本主義社會史」と趣旨の上で同じ線上にあるものたることを妨げない。より重要な問題は相川氏により提示されてゐる「歴史科學」の對象規定及び敍述様式に關してゐるが、あとでふれることがあらう。

## 五　歴史記述の唯物論的再構成への途

以上みてきた諸著作はいづれも史的唯物論と歴史記述の問題を史學ないしは史學批判の立場からとらへつつ、夫々の方向において歴史記述のための一般的方法の建設を所期しつつあるもの――相川氏の言葉を藉りると「歴史科學のマルクス主義的再建築」を所期しつつあるものといふことができる。

ブイコフスキーの消極面は彼がいきなり問題の立て方をブルジョア記述學派的設問に添

うて行つたところにあつた。「歴史研究の技術」の問題は「史料」の處理の仕方に始まるのでなく、「對象」を處理する仕方に始まるべきであらう。史料なき對象を歴史家はいかんともすることができぬではないか――といふ逆襲はこの場合無意味以上のものである。なぜなら、對象なき史料を取扱ふといふ點にこそ、ブルジョア記述學派的方法論の本質があつたのだから。一例をとれば「史料學」なるものは歴史家のためのあらゆる史料源泉を級別し特質づけることにあるのだが、原始共産時代あるひは古代社會を對象とする場合の史料學と例へば明治維新を扱ふ場合の史料學とは根本的に異なるものであるはづだ。グーコフスキー的ないしは相川氏的「歴史科學」――初期資本主義段階にいたるまでの前資本主義的普遍史を歴史家が對象とする場合でも、史料學の構成が對象によつて規定される點には變りはない。「前資本主義社會史」でグーコフスキーが與へてゐる史料學は粗雑ながらこの規定性を意識してゐる。しかしいきなりベルンハイムに倣つたブイコフスキーの史料學にあつては既に史料は完全に對象から捨象されることによつて、それじたいが唯一の對



象にまで外化させられてゐるのである。現實としての特定發展段階上の（乃至は全列の必然的發展段階における）歴史に對する關係から遊離せしめられた場合の史料一般の技術學なるものは、一片の無意味でしかない。ベルンハイムは「日本版」を以て世界にデビューした最新改訂版の中で寫眞術と寫音術（フォノグラフィ）を新たに「史料」として公認したが、かくてトーキーが新たに屬する史料第一類と、ローレライがぞくする第二類と、墓石がぞくする第三類とを以て彼が科學を構築する風景は、たいくつさに於いて何一つ變りばえはないのである。

かくて、史學再建の課題を特に「歴史研究の技術學」の問題として捕へるとしても、史料の處理の仕方のまへに、對象の處理の仕方の問題が解決されなければならない。史觀がこれを解決する。ベルンハイム流の「精靈の壺」的「技術學」の構成すら、實は對象を處理する仕方としての彼の史觀によつて規定されてゐたのである――すなはち、具體物としての史的實在を本質的には處理することが出來ないといふ彼の史觀に。

だからブイコフスキーが「史的唯物論はこの方法――彼のいはゆる歴史研究の技術的方

法――を取扱ふことはできぬ」といふ場合、この言葉の具體的意味に於いてはベルンハイムの喝采を得るであらうが、この言葉の論理的内容すなはち史觀と研究方法とを機械的に分離する意味の上では、彼はベルンハイムの側からさへ嚴密には非難されなければならない。反對にまたブイコフスキーが「技術的方法學は廣義に解された史的唯物論の理論の一部を構成することができる」といふ場合、彼は彼が所屬する「歴史家マルクス主義者」としての課題を表明したにとどまつてゐて、しかも現實にこの課題を貫徹してゐないといふ非難を、つひに甘受せざるを得ないであらう。これをあきらかにするため彼にもいちど立還へるといふ意味よりもむしろいま一歩すすめて、いはゆる「技術的方法」の展開がいかに必然的に史觀の展開を前提とし、それによつて貫徹されなければならないか、といふ事實をまざまざと見るために、彼の著書の第一部「歴史研究の技術」の諸章のうち、一見彼がベルンハイム的史科學の構成から脱けだしてゐると思はれるやうな後半部諸節をパラフレーズしつつ一瞥しよう。



**歴史的文獻の研究（第六節）**

若し歴史家が現存する歴史文獻を殘らず研究せねばならぬとすれば、思ひもよらぬことであらう。基本的文獻、それも特に最新のもののみが研究に値する。また、全歴史過程をくまなく史料によつて研究するといふことも、云ふべくして行はれ難い理想にすぎない、むしろ歴史家は、一般的研究のほかにめいめいの狹い專門を持つべきだ。そして史料的研究（あのやかましいベルンハイム的な！　服部）もこの狹い專門限界内でやればいい。

この專門的研究以外の歴史的文獻の研究のためには、歴史家は丈夫な紙の小型カードを準備して、著者の題字と姓・正確な書名・出版年次以下云々を記入する等々

**狹い專門の限界内における文獻の專門的研究（第七節）**

一、撰ばれた主題のための歴史的文獻の目錄の作製――無條件的にすべての最新の文獻を網羅しなければならぬ。目錄作製の場合問題の重要性は、題目の性質により、また史的唯物論の要求に照應して決定される。

二、將來研究すべき資料の豫備的一覽表

三、資料の批判的文獻の一覽表――二と三は、一をつくる途上において不斷に完成される。

これら目錄の作製が終了するや、即刻文獻そのものの研究が開始さるべきだ。最新の文獻から

より古い文獻へといふ順序を銘記。

### 材料蒐集の技術（第八節）

どの著作が、そして著作中のどの部分が、どの程度に重要かを決定することは、勿論研究者自身に依存し、また主題に、そして主題が關接する歴史過程の特性に、最後に史的唯物論の理論の基本的要求に直接依存する。

さて材料蒐集の技術には二つの樣式――カード法とノートブック法がある。兩樣式の夫々の便不便についての詳細な注意。（次手ながら、日本の我々としてならば、半ピラ原稿用紙といふ第三の樣式において、前記兩樣式の便不便を完全に止揚できるといふ注意を與へたでもあらう）。



### 研究計畫と蒐集された資料の整理（第九節）

研究の方向決定的計畫の作製。資料通讀の後、執筆の直前、これを作製すべし。カード式の場合の作製の仕方とノート式の場合のそれの異同。問題の性質それ自體とその順序とは……また史的唯物論により云々。

### 資料の吸收（第十一節）

史料の範圍内での完全な把握と史料の範圍の最大限の切捨。これ資料的吸收に際しての辯證法的矛盾の眞理である。

いかなる問題が基本的であり、いかなるそれが第二次的であるかの決定そのものは云々。

### 錄述について（第十二節の後半）

史料は、できうる限り自己の言葉で、即ち自己の文體の形で記述して、文字通りの引用は、特に不可缺な場合にのみ、例外的に行ふべきである。しかし材料の敍述の規則といふものは、示す

ことができない。

ブイコフスキーが問題の後半部で歴史の研究及び敍述の一般的方法として與へてゐるものはほぼ如上のものであつた。いかにもそれは、歴史學の學生にとりためになる諸々の忠言から成つてゐる。けれどもそれは、唯物論的歴史家がそれなしには濟まされないやうな、對象を占有するための唯一の仕方たるべき「方法論」であつたらうか。かかるものは、わづかに一片のリフレインの形で、下の如く夫々の場合で繰返へされてゐるにすぎない。曰く「いかなる問題が基本的であり、いかなる問題が第二次的であるかの決定そのものは、以下によつて嚮導さるるところの研究者の責任に處することを想起してをかう。

（一）彼によつて蒐集された材料の性質。

（二）研究題目の性質

（三）研究題目に關係する部分の歴史過程の特殊性。



（四）史的唯物論の理論の諸命題。」

彼はこのリフレインを殆んどあらゆる節ごとに――例へば上記第七節では「歴史的文獻目錄 作製の場合で、第八節ではカード作製に際しての問題の重要さの撰擇の仕方として、又第九節では研究計畫書作製の場合の指針として等々――繰返へすのであるが、もつと粗雜な形で云ふ場合はあつても、これ以上の詳細については何一つ述べないのである。だが、何人にもすぐわかるやうに、まさにこの點を夫々の場合に具體的に指示することにこそ、歴史研究及び記述に於ける「歴史家マルクス主義者」と他のものとを區別する方法上の特質が存在する。歴史研究にあたつて各々の史料をとり蒐め、カードを或はノートを作製し、整理し、篇別を作製する等々の手續は、凡そ歴史家たる限り精なり粗なりに何人といへども經驗せずには濟まされない。問題は此等それぞれの形式的手續に生命あらしむるところの、對象を處理する仕方としての理論の武器にかかつてゐるのだ。ブイコフスキーは之を殆んど發展させてゐない（第二部「歴史的批判」の最後の一部をのぞいては）。* 例へば

右に上げたリフレインにしたところで、（三）の「研究題目に關係する部分の歴史過程の特殊性」なるものは他のものと共に、明らかに（四）「史的唯物論の諸命題」から別箇のものではありえないだらうに。

＊。彼の著書の第二節「歴史的批判」の大部分は、やはりベルンハイム的史料批判學の單なる雨又風に於ける再生にすぎない。ただ、彼により再構成された四列の史料批判形式にとつて最後のものにあたる「記念物の最終批判的綜合的批判」なるもので始めて唯物史觀の方法が史料批判學に適用されてゐるのをみる。ブイコフスキー自身つぎのごとく要約してゐる。「記念物の最終的綜合的批判のつぎの五つの方法を確認することができる。（一）方法論的考察の方法。（二）歴史的類推法。（三）對照法。（四）補助的歴史部門の資料の吸收の方法。（五）殘存物法。すべてこれらの方法は、本來、史的唯物論の理論がその根柢たるところの、同一の方法の變種だ」（一八四頁）。

だがこの最後の形式と、それに先行するベルンハイム的な三形式との、與へられてゐる如き形態に於ける結合がはたして充分に「方法的」であるか否かは、さきに第一部の構成で見たごとく



考慮の餘地が澤山あるだらう。

史的唯物論の理論は人類發展の法則に關する最も包括的な歸結であるから、全ての社會科學にとつて「研究の導き」の糸となり、歴史家にとつては、彼が對象を處理するための最も一般的な仕方がそこに見出される。歴史家が如何なる主題、如何なる時代を扱ふにせよ、單なる記述を以て滿足せず必然性合法則性にしたがふ記述たらしめんがためには、何よりも先づ此の包括的命題に基づくのである。エンゲルスがマルクスの歴史記述を性格づけて「歴史科學を變革する處の此の發見」即ち方法としての史的唯物論に基づいて「從來の歴史記述に於ては全く何等の役割を演じてなかつたか、またはただ侮蔑的役割をしか演じてゐない經濟的事實が……決定的歴史的勢力と見る歴史記述」（「ケルン共産黨事件への暴露序文」）と云ひ、或は「彼の唯物論的見解によつて時代史の一片を與へられた經濟情態から說明するマルクスの最初の試み」（「フランスに於ける階級鬪爭へ」の序言）と

述べてゐるのは、歴史研究の方法等に於ける第一過程であり、ブイコフスキー的課題における出發點たるべきものであつた。

そうだとすれば歴史科學再建の途上ブイコフスキー的試みの對極的なものとして提示されてゐた處のグーコフスキー及び相川氏的試圖も亦當然この發程の線上に再發見される事が明らかであらう。社會經濟的構成の中に社會的意識を決定するための社會的存在を認める（これは特に世界觀的な云ひあらはしであるが）、あるひは、「時代史の一片を與へられたる經濟情態から説明する」と云ふ事は如何なる發展階上の歴史的對象にも通ずるものであると共に、各々の發展段階がそれぞれに固有なる發展法則を持つと云ふ事と又同じ史觀のより詳細な展開として、從つてまた歴史記述の方法にとつてのより詳細な諸規定として、與へられてゐるからである。かくてグーコフスキ及び相川氏的試圖に於いてみられるいはゆる一般的歴史（普遍史）への課題と、ブイコフスキー乃至ベルンハイムが事實上もつぱらそこに踏足してゐるところの特殊歴史のための技術的方法論への課題とは、史的對象を



處理する場合の唯物史觀史學にあつては二つのものではなく一つのものとして統一される。「歴史科學のマルクス主義的再建築」の課題は、特に普遍史の問題でもなく、また特に特殊歴史の「技術學」の問題でもありえない。歴史家が對象としての歴史的具體物を處理するための方法如何――といふ設問の線上に、史的唯物論の全遺産を再展開せよ、しからばそこに、從前一切の歴史理論家を當惑させた方法上の諸問題が、自ら解決の途を得るにちがひない。

# 第二章　歴史記述の對象と方法

## 一　歴史記述の對象と主題

對象の無規定性といふこと――これは換言すれば、歴史記述はすべてのものを對象とするといふこととなる――がすべての記述學派のいつはらざる告白であつたことは、すでに述べたところからあきらかであらう。この告白の上でブハーリンはいかなる記述學派史家よりも卒直であつたといへる。たとへばベルンハイムは彼の史學に「科學」の外見を附與すべく史學の對象を「共同體をなす存在としていろ〳〵活動する人間の空間的時間的發展の諸事實」（岩波文庫版七二頁）といふ風に規定するが、この場合「共同體をなす存在としての」といふ言葉が一片の空虛な形容詞にすぎなかつたことは、ベルンハイム自身につき



論證するに何ら困難ではないが、むしろブハーリンによつて何より卒直に表明されてゐるのを見る。すなはち、「一般的に云つて、科學なるものは二つの目標を立てることが出來る。科學は、一定の時代に一定の場合にあつたもの、又は現にあるものの記述に從事するか、それとも諸現象の法則を抽き出さうと努めるかである。前者の場合には科學は個體記述的性質を帶び、後者の場合には法則定立的性質を帶びる」（「金利生活者の經濟學」）。この「純粋記述」科學としての史學の規定は、對象の問題を事實の上で完全に抹殺することで成立する。換言すれば世にありとあらゆるものが殘りなく史學の對象たるべきであり、一切の史料が撰擇の餘地なく歴史家の素材たるべきであり、一般史としての歴史とならんで（ならんで、或ひはそれから獨立して、あるひはそれを否定しつつ）あらゆる「側面における」無限に分化する個々の歴史の獨自的存在がゆるされ、單に一片の史料そのものの提出すら「歴史家」としての在籍證明書となるといふすさまじい事態が成立したのである。かかるすさまじい事態への理論的辯護はブハーリンにより始めて與へられたものではもと

より無い。「經驗的現實は、もしこれを普遍といふ立場から考察すれば自然となり、もしこれを特殊といふ立場から考察すれば歴史となる」といふ有名な文句で、對象としての歴史を規定したものはリツケルトであつた。このリツケルトと「殆んど全く一致してゐる」と自稱するマイヤーの史學では、「歴史の職能は、いつか一度現實世界に起つた事變の經過を、究明し表現敍述することである」――史學の對象は「いつか一度現實世界に起つた事變」であれば足り、ランケの言葉なら wie es eigentlich gewesen（事實は一體どうあつたか）の "es" であらう。「對象」の無規定性はまことに「非科學性」の立派な證明であつた。

かくいへばおそらく、人は同じマイヤーの主著によつて、手いたく私を反駁することができる。曰く、エドウアルト・マイヤーは歴史的なものを「影響あるもの」wirksam と規定したではないか。歴史的關心の對象となる一個人、一民族、一國家、一文化、「これらの對象の如何なるものも、それが嘗てひとたび世界のうちに在りもしくは在つたといふ理



由で純粋にそれ自身のために關心を喚び起すのではなく、却つて唯それが及ぼした且つなほ及ぼしつつある影響のために關心を喚び起すのである。」「現存する諸狀態はそれ自身として決して歴史の對象でなく、却て唯それが歴史的に影響ある限りに於てのみ、歴史の對象となる」と述べてゐるではないか。＊

＊　三木清「歴史哲學」八―九頁。

いかにもこのやうなものがマイヤー史學における「對象」の規定であつた。その證據には、かくのごとき對象規定そのものにおいてマイヤー史學じたいが立派に敍述されてゐるのを見るから――すなはち、「歴史は何らの體系的な科學ではない」といふ、また「多年の歴史研究に於て、私自身、いまだ嘗て歴史法則を發見したことがない」といふ、歴史的相對主義の理論そのものが凝集されてゐるからだ。かくて茲では「對象」は規定されてゐるのではなく撰擇されてゐるにすぎない。なぜなら、それじたい法則性を具有せざる對象、

主觀からの獨立性をもたないやうな具體物は、凡そ「科學」――「科學」に尻をまくつたマイヤーにむかつては風馬牛かもしれぬが――の對象たりえないからである。對象を規定し得ないからこそ彼等はこのんで對象を擇撰する。だが、撰擇しうる對象とは、せい〳〵のところ――唯一に合理的な意味に於いてならば「主題」のことでしかないであらう。

さて、科學的歴史記述にとつての對象規定は、史的唯物論の理論そのものとして與へられてゐる。唯物史觀が世界觀であると同時に歴史學の第一次的方法論たりうる所以も、またここにあつたのである。唯物史觀の最初のまとまつた敍述といはれる「ドイツチエ・イデオロギー」は、ドイツ的觀念形態特に「ドイツ的歴史敍述」――すなはちヘーゲルまでの歴史哲學と及びフオイエルバツハにいたる後期ヘーゲリアンの歴史哲學――の直接的批判を目的として、なによりまづ史的唯物論の基本的諸命題を「一切の歴史敍述」の「出發點たる諸前提」の解明として――「なんら恣意的なものでなく、なんらドグマでなく、た



だ空想においてのみ人はこれを度外視しうるやうな、現實的な諸前提」の解明として、換言すればここにいふところの對象規定として、與へてゐるのである。

「この觀方は無前提ではない。それは現實的な諸前提から出發し、一瞬といへどもこれを見離さない。この觀方の諸前提とは、なんらか空想的に孤立せしめられ固定せしめられた人間ではなく、現實的な・經驗的に觀察されうる・特定條件下の・發展過程に於ける人間である。この活動的な生活過程にして敍述されるや否や、歴史は最早、かの〈眼界の狹い〉自身なほ抽象的な經驗論者たちに於けるやうな、死せる諸事實の蒐積たることをやめ、あるひはまた、觀念論者に於けるやうな、空想的な主體の空想的な行動たることをやめる。

かくて、思辯のやむところ、現實の生活において、そこに現實的な實證的な科學が、即ち人間の實踐的活動の・人間の實踐的な發展過程の敍述がはじまる。意識についての饒舌は影をひそめ、現實的な知識がこれに代らねばならぬ。獨立なものとしての〈科學〉哲學

は、現實の敍述がなされると共に、その存在の媒質を失ふ。哲學の代りに現出するものありとせば、およそそれは、人間の歷史的發展の觀察から抽象して得られるところの最も一般的な諸結論の總括である。これらの抽象は、それ自體としては、現實の歷史から切り離されては、全然なんらの價値ももたない。それらのものはただ、歷史的諸材料（ゲシヒトリッヘ・マテリアルヘン）の整理を容易にし、それの個々の層の序列を示唆するに役立つことができる。けれどもそれは決して、哲學のごとく、歷史的諸時代がそれに從つて切り盛りされ得るやうな處方箋もしくは圖式を與へるのではない。それどころか、困難はまさに、ひとが〈歷史的〉諸材料——過去の時代であれ現代であれ——の觀察と整理に、〈種々なる層の現實の實際的關聯關の探究に、從事するときに〉、現實的な敍述に、從事するときに、そこにはじめて生じるのである。これらの困難の〈解決〉除去は、種々様々の前提によつて條件づけられてゐるのだが、それはここで擧げうるていのものではなく、却つて各々の時代の諸個人の現實の生活過程及びその實踐的活動の研究を俟つて判明するものである。ここで我々は、我々がかのイデオロ



ギーに對抗して使用するところの、この種の抽象の二三を取り出し、そしてそれを歷史的諸事例について解明してみよう」*

* 「ドイツチエ・イデオロギー」岩波文庫版では五〇—五二頁。

アドラツキー版では、右文の直後から「歷史」なる節に移り（註）、そこで「生產力、社會狀態および意識、これら三つの機契」についての解明が行はれてゐる。すなはち生產力生產關係（及びその總和としての社會經濟的構成）・社會的意識形態（及び上部構造）等の諸命題が、「この種の抽象の二三」として、卽ち「歷史的諸材料の整理を容易にし、それの個々の層の序列を示唆するに役立つ」——ブイコフスキー的課題の眞に合理的方法的な側面——やうな「一般的歸結の總括」の一部として與へられてゐるのである。史的唯物論の理論が歷史研究の一般的方法であるといはれる場合、人々は多かれ少なかれもつぱらこのへんの事態を考へてゐるのであるが、ここで强調されなければならないことは、この

種の諸命題（諸「抽象」・諸「歸結」）の「方法」的意義——詳言すれば、歴史家が對象を處理する場合の方法としての意義は、「現實的な・經驗的に觀察されうる・特定條件下での發展過程における人間」・換言すれば物質的生産の特定發展段階上における人間・といふ對象規定から不可分なものであるといふことである。かくて、最も完璧な形にまで要約された場合の史的唯物論の命題としての、「經濟學批判序文」のいはゆる公式の冒頭の一節で、對象規定と對象を處理するための方法とは、既に間然するなき統一に於いて與へられてゐるのを見る。本來、對象規定とは方法からの要約であると共に、方法の敍述に於ける出發たるべきものであり、したがつて方法それじたいであり、方法の總括であるからだ。對象を規定するといふことは、同時に對象を處理する仕方のエスプリたるべきものである——ヘーゲルの命題の唯一の合理的理解は、かかるものとして與へられると考へる。

（註）アドラツキー版の篇列は、

一　フオイエルバツハ。唯物論的見方と觀念論的見方の對立。



A　イデオロギー一般、特にドイツ的。

1　歴史

2　意識の生産について

B　イデオロギーの現實的基礎

1　交通と生産力

2　國家及び法律の財産に對する關係

3　（自然生産的及び文明的生産要具と財産關係）

C　××××。生産と交通形式自體

そのうち、書題本來の任務たるところのフオイエルバツハを主題とするドイツ的觀念形態の直接的批判の仕事は、殆んどもつぱら「2、意識の生産について」に於いて試みられてゐるばかりで、爾餘は唯物史觀の積極的展開に捧げられてゐる。「A、イデオロギー一般、特にドイツ的」の序論的部分、即ち「1、歴史」の直前に來る部分では、物質的生産の諸樣式及びこれに對應する財産形態として、（一）種族財産。（二）古代的財産。（三）封建的又は自分的財産。（四）近代資本家的財産、但しこれの敍述は與へられてゐない）、之を要するに、後年「經濟

學批判」序言中に、社會經濟的構成の進歩の諸段階として要約したところのものが與へられてをり、「1、歴史」の一節では、「人間の歴史的發展の觀察から抽象して得られるところの最も一般的な諸結論の總括……（前出）……これら抽象のうちの二三」についての解明を與へる。すなはち「生産力、社會狀態及び意識、これら三つの契機」についての分析的解明が「1、歴史」の主内容となつてゐる。そして二及びU章はこの「1、歴史」の節のさらに精細な展開にあてられてゐると考へることができる。

なほ、アドラツキー版「ドイツチエ・イデオロギー」邦譯は、唯物論研究會の譯本としてちかく出版を約束されてゐるが、さしあたり讀者は「唯物論研究」第五號所收の拙稿により、岩波文庫版（リヤザノフ版）からアドラツキー版を再構成することができる。

「人類はその生活の社會的生産に於いて、特定の、必然的な、彼等の意志から獨立せる關係に入りこむ。すなはち、彼等の物質的生産諸力の特定の一發展段階に照應せる生産諸關係これである。

これら生産諸關係の總體は社會の經濟的構成を形成する。これ、一の法制的及び政治的



上部構造がその上に聳立し、特定の社會的意識形態がそれに照應するところの、現實の基礎である。

物質的生活の生産樣式は社會的、政治的及び精神的生活過程一般を條件づける。人類の意識がその存在を規定するのでなく、むしろ却つて人類の社會的存在が彼等の意識を規定する」。

歴史記述の學――史學のための對象規定は、ここでは對象の構造的規定として與へられてゐる、（それに續いて、人々が知るやうに、構造の辯證法が與へられてゐる）。ところで一般に歴史的社會諸科學――經濟學、法及び國家の理論、イデオロギーの理論等々は、唯一の具體物としての歴史的對象のこれら構造的規定性の各側面について成立するといふ風に考へられてゐる。例へば經濟學は社會經濟的構成を、あるひはいはゆる下部構造を――對象とし、法及び國家の理論は法制上及び政治上の上層建築を特別の對象とする、といふ風に、この考へ方は、後で特に經濟學について述べるやうに、おそらく嚴密な意味では正

しくはないであらう。歴史的社會諸科學はむしろ、對象を分析的に領得するための夫々の階相（フェーゼン）であり、ひらたく云へば手順である。これに對して科學としての歴史記述は、すでに分析的に領得された全姿に於ける對象の最後の仕上げ——もとより「頭腦の内部における全體」としてのそれ——であるといへやう。だがこの問題についてはさらに次章でくわしく扱ふこととして、さしあたりここでは、しからばかくのごとき「全體」としての對象は、——それは無限に具體的な存在であり、ある哲學に云はせれば「生」であり、「無限」であり「いま」であるといふほどしかく盡未來濟的な複合體であるものを、——歴史記述においては抑々いかにして一時に全體を處理され能ふのであらうか、といふ問題に答へてをかねばなるまい。

第一に、史學は決して、それじたいとして、一定の順序をふまず一足飛びに、この對象を處理するものではない。

かくの如き全體としての具體物を把握するための方法じたいが、歴史學のためにこの具



體物を對象規定した唯物史觀そのものに於いて與へられてゐるといふことは、すでに述べたが、これら方法はさらに展開されて、各社會諸科學に固有な方法となる。歴史的社會諸科學は、本來かくて歴史學の對象を把握するための「理論」であり、經濟學はそのうちの就中基幹的な位地に居る。けれども經濟學は、それじたい歴史學では決してない。歴史學の對象は、あくまでも、與へられたる構造的規定性における具體物そのものであるのだから。換言すれば、社會諸科學はそれぞれの序列と限界とに於いてこの具體物を規定する。けれども歴史はつねに全體としての具體物じたいの規定を求める。この間に於ける、歴史的諸科學の地位と彼割とを、假りにここでは對象の質的規定、やや哲學風に云へばその質的自己限定に於ける對象の領得といつておく。第二に、史學は決して一時に「全體」としての對象を扱ふものでも、扱ひ得るものでもない。對象の複合性が無限であるとすれば、御このみの哲學者がいふやうに、無限はつねに自己を限定しつつあらはれる。ところで歴史的具體物は歴史家に對して、自己を限りなく限定しつつ立ち現はれる。「限りなく限定する」

といふはいかなる意味か、社會諸科學に於ける具體物の對象規定は、具體物の質的自己限定であるのに對して、この場合は量的な自己限定であるが故に無限の限定といふのである。「ブリュメール十八日」、「ドイツ農民戰爭」、「家族、私有財産及び國家の起源」、「猿の人間への……」。これらすべていふところの量的自己限定であるだらう。

――對象が所屬する時代が夫々違ふだけではないか。「時代區分」はむしろ對象の質的自己限定ではないか？――

よろしい。「時代區分」そのことについてはあとで述べよう。然らば今度は時代區分の問題を完全に抽象して、單なる量的自己限定として下の如きは如何――卽ち「五月三十日の議會に於けるカンプハウゼンの聲明」、「ポーランドの新分割」、「フランクフルトに於ける暴動」、「ウイーンにおける革命」、「イタリーに於ける英佛協定」、「ゴットシャルク及びその他の同志に關する訴訟事件」、其他等々、等々。

――同一時代ではあつても、すべてこれらは「新ライン新聞」に載つた政治評論で、なんら歷史ではないではないか！――

「新ライン新聞……では、この理論はつねに、同時代の政治上の出來事を說明するために利用せられた」といふエンゲルスの言葉を擧げた以外には、歷史記述と政治評論との同一性の契機については、なるほどまだ殆んど何事も陳べてなかつた。それなら、「假りに」これを夫々の歷史記述と見ることとして論じよう。この場合、一八四八年―四九年に與へられてゐたところの單一の歷史的具體物は、單に量的な限定を受けてゐるにすぎない。質的にはどの場合にも、つねに對象はその全姿に於いて把握されてゐたからである。さきにあげた一列の事例の場合でも、「時代區分」といふ問題を抽象してみれば、同一のことが云はれうる。さらに手近い事例で云ふなら、十九世紀初中期における歷史的具體物を――かく「時代區分」的に自己限定せる我等の對象を――特に「明治維新史」として歷史記述する場合すでにそれは量的限定の下にあらう。況んや更にもつと無限にそれは限定されて、「奧羽戰爭」とも「西南戰爭」とも、「地租改正」とも「廢藩置縣」とも、「明治初年農

民騒騒」――「錄」ではなく――「史」とも、「大久保利通」とも、なりうるのである。だが、そのいかなる細限定の下においても、科學としての歴史記述たらんがためには、つねに對象は質的全姿に於いて把握されてなければならず、記述は對象的把握に於ける記述として現はれなければならない。これらすべての場合に於いて「大久保利通」、「明治維新」、「ブリュメール十八日」、「ゴットシャルクに關する訴訟事件」等それじたいは抑々「對象」であらうか。量的に限定された場合の對象は、すでに對象とよばれることをやめて「主題」と呼ばれる。主題の撰擇はもとより歴史家にとつて自由ではない。



## 二　歴史學の對象と經濟學の對象

すでにいかなる量、いかに微小なる「主題」に於いても、對象はその質的全姿に於いて與へられてゐること、換言すればいかに微小なる「主題」といへどもこれを「歴史」として處理するためには全體としての質的規定性に於いて叙述しなければならぬといふこと、を明らかにした以上、さらにここでは對象の質的限定の問題に、より仔細に立入らなければならぬ。その場合經濟學が、決定的な位置につく。經濟學を措いて對象の質的規定性をあきらかにする手段はありえない。なぜなら經濟學こそは、對象の本質的諸契機を、特に質的に限定されたる對象としてもつものであつたから。

經濟學の對象は、與へられたる具體物としての歴史的實在の「土臺」をなすところの社

會經濟的構成であるといはれてゐる。この命題の眞實の意義については本節の叙述につれてあきらかにならう。ところでマルクスは「經濟學批判序說」中の「經濟學の方法」なる一節で、對象としての歷史的具體物を科學的に處理する方法に於いて經濟學が占める位置と限界とを規定してゐると私は考へる。

このことを明らかにするために、何よりまづ、この重要な一節の中で屢々繰返されてゐる言葉「具體物」「全體」「實在的な主體」「主體たる社會」「主體としての近代資本主義社會」等々は、いづれも私がこれまで述べ來つたところの「具體物」卽ち、本來歷史學の對象をなすところの歷史的具體物を意味してゐることを注意してをかねばならぬ。

「頭の中に思想上の全體として現はれるがごとき全體は、自己にとつて唯一可能な方法に於いて世界を領得するところの、思惟する頭の所產であり、卽ちその方法は、此の世界の藝術的・宗教的・實際的・精神的領得（アンアイグネンク）とは異なるものである。實在的の主體は依然



として頭の外部にその獨立性において存在する——卽はち頭がただ思辯的にのみ、ただ理論的にのみ、振舞ふ間は。だから理論的方法に於いてもまた、主體たる社會が、前提として絕えず想像に浮んでゐなければならない」。*

* 「經濟學批判」S. XXXV 改造社全集第七卷四〇一頁。

ここにいふ「全體」は「生きた全體、卽ち人口、國民、國家、諸國家等」（例へば十七世紀の經濟學者達は、つねに、生きた全體卽はち人口、國民、國家、諸國家等を以て（その研究を）はじめた」）であり、從前のべたところの史學の「對象」たり又は「主題」たるものにほかならない。マルクスの設問はむしろかくの如き「全體」又は「具體物」を領得するための「經濟學の方法」はいかなるものか、にかかつてゐたのである。そして彼の歸結はつぎの如きものであつたことを人々はよく知つてゐる。

「一般にいづれの歷史的社會科學にあつても然るごとく、經濟的諸範疇の行程に於いてもまた下のことを牢記すべきである。すなはち、現實に於けると同じく頭の中でもまた主

體――ここでは近代的市民社會――が與へられてゐるといふこと。そして、諸範疇はそのゆゑに、この一定の社會の、この主體の、存在形態、存在規定を表現し、且つ屢々その個々の側面のみを表現するにすぎないといふこと。そして、それゆゑにまた科學的には、現實にその呼聲を聞く場所からその筆を起してはならないといふこと。これらの事を牢記しなければならぬが、その所以は、これが經濟學の篇別に決定的なものを與へるからである」

「かくて、經濟的諸範疇を、歷史上それらが規定的存在であつた順序にしたがつて繼起せしめることは、出來がたいわざでもあり、間違つてもゐるであらう。むしろその序列は、それらが近代的市民社會に於いて相互に對して有するところの、關係によつて規定され、そしてこの關係は、自然的情態における關係と見えるもの、あるひは歷史的發展の順序に適應する關係の、まさに反對である。玆で問題なのは、經濟的諸關係が種々なる社會形態の繼起のうちに占むるところの地位ではない。……むしろ近代的市民社會の內部における



その（經濟的諸關係の）編成が問題なのである」。

ここではわざと、カウツキーが勝手に挿入した〔經濟學は〕といふ註釋的主語を脫いて譯出してみた。……"und dass die Kategorien daher Daseinsformen, Existenzbestimmungen, oft nur einzelne Seiten dieser bestimmten Gesellschaft, dieses Subjektes, ausdrücken, und dass [die Ökonomie] daher auch *wissenschaftlich* keineswegs da erst anfängt, wo nun von ihr *als solcher* die Rede ist."

テキストを單に文法的に解釋してみるだけでも、カウツキーが挿入した主語〔die Ökonomie〕は〔die Kategorien〕でなければなるまい。況んや、單なる文法的解釋から離れて內容的な理解の上から見る場合、〔諸範疇は〕と解釋することによつてのみ始めて前後の意義があきらかにされうることは、ここに對照的に示した二つの引用文を彼此照合することで一層明瞭であらう。カウツキーに從つて「經濟學は」と主語する場合、いかに內容上無意味な、不可解な文章が生れるかは、左例について認められる。

「だから〔經濟學は〕また、經濟學としての經濟學が問題とされるときに始めて科學的に開始されるものではないといふ事」（宮川氏譯本、一九二六年初版本）

「そして〔經濟學は〕それだから科學としてもまた決してそれがかかるものになつたと今云はれてゐる時に初めて起源するものではないといふことである」（改造社全集、第七卷）

私がここで與へた譯文も、決してほめたものではないが、カウツキー挿入の〔經濟學は〕の主語を、假りに全然ないものとして譯出した場合の試圖にすぎない。モスクワ版を參照する機會がないのは遺憾だが、この點はそこではどうあらうか。

マルクスの解答は、特定の具體物――ここでは近代資本主義社會としての具體物――を領得するための經濟學的方法は、その具體物に於いて支配的な性格を帶びるところの經濟的範疇を以てしなければならぬといふに在つたのである。右に擧げた二個の同一命題を一は消極的に、一は積極的に表明した章句の、相互の中間を埋める一文はこのことを端點に述べることから成つてゐる。

「例へば地代から、土地所有から始めるくらゐ自然なことはないかに思へる。何となれば、それはすべての生産すべての存在の源泉たる土地と結びついてをり、且つ多少とも定



着せるすべての社會の最初の生産形態たる農業と結びついてゐるからだ。しかしこれほど間違つたことはない。あらゆる社會形態においては、すべての生産に優越し、從つてその關係が爾餘のすべての關係に夫々の地位と勢力とを割當てるところの或る一定の生産が存在する。

それは一の一般的照明であつて、爾餘のすべての色彩はそれに浸され、それの特殊性にしたがつて修飾される。それは一の特殊なるエーテルであつて、その中に現はれるあらゆる存在の比重を決定する。」

一例をとれば、古代及び封建社會の如く定着的農耕が支配してゐるところでは――と、マルクスは續ける――工業も、その組織も、その所有形態さへも、多少とも土地所有的な性格を帶びる。中世では資本そのものすら、傳統的な手工道具等としてこの土地所有的性質を帶びてゐたのである。

「市民的社會においてはこの逆である。農業はますます單なる一産業部門と化し、全く

資本によつて支配される。地代にしても同じことである。土地所有が支配してゐる一切の形態においてはなほ自然關係が優勢である。資本の支配するところの諸形態に於いては歴史的に創出された社會的要素が優勢である。地代は資本を理解せずしては理解し得ない、しかし資本は地代を理解せずして十分理解することができる。資本は資本家的社會のすべてを支配する經濟力である。それは出發點をなすと共に終局點をなさねばならず、そして土地所有に先んじて展開されなければならぬ。兩者が特別に考察されてのち、その交互關係が考察されねばならぬ」。

與へられたる具體物たとへば近代資本制社會を領得するためには、經濟學は、所與の具體物の物質的生産に於ける「一般的照明」たるごとき支配的範疇から、たとへばこの場合は「資本」から出發するばかりでなく、出發してさらにそこへ歸つてこなければならぬ。この「方法」的命題の中にこそ、經濟學が、對象としての具體物の質的規定性をあきらかにする科學たることがまづ明示されてゐる。



經濟學が對象を質的に規定するといふことは對象を歴史的規定性に於いて把握することである。なぜならさきに見たごとき「經濟學の方法」は、經濟學をしてつねに特定の歴史的社會構成體の解剖學たらしめ、同時に二個の、況んやすべての、歴史的發展段階上の具體物を、一般的に扱ふやうな科學たらしめないからである。經濟學は一方で、史學に於いてふるい歴史をもつところの發展段階の理論に對して、はじめて一の客觀的な根據を與へることができたが、これは夫々の經濟學がそれじたい對象としての特定發展段階に――かつそれのみに――固有なる解剖學たりうることで可能になつたのである。マルクスは「序言」の唯物史觀のいはゆる公式の最後のところで、――すなはち先づその構造的規定性としての對象規定から出發し、ついで對象の辯證法を與へ、その最後に――「我々は極く大づかみに、アジア的の、古代（ギリシヤ・ローマ）的の、封建的の、及び近代資本家的の、生産樣式を以て、經濟的社會構成の前進的な諸時代とすることができる。資本家的生産樣式は、社會的生産過程の敵對的形態を採れるものゝ最後である云々」と要約を與へてゐる

が、このすべての發展段階・すべての社會經濟的構成を通ずるやうな普遍的な一個の經濟學がありえないと同樣に、また夫々の發展段階をその歷史的序列に於いて辿るやうな別個の經濟學もまたありえない。「經濟的諸範疇を、歷史上それらが規定的存在であつた順序にしたがつて繼起せしめることは、出來がたいことでもあり、間違つてもゐるであらう」といふ、先に擧げた引用部分の辯證法的な意味を、ここでもはつきり摑んでゐなければならない。諸範疇の歷史的展開と諸範疇の歷史的規定性に於ける展開とは、相互に相容れないばかりかむしろ互に逆の關係に立つといふ命題は、史學と經濟學の辯證法を最も端的に語るものであつた。この點をも少しくわしく見よう。

經濟學は與へられた發展段階の物質的生產に於ける支配的關係を基準として構成される。その結果、同一の範疇であつても異れる經濟學に於いては異なれる意義と色彩に於いて見出される。たとへば、さきの引用に於ける「地代は資本を理解せずしては理解できない」を前後の構成から切離してそれだけ取り出すとその意味はすつかり神秘化されてしまうだ



らう。蓋し、對象が封建的社會經濟構成たる場合には、地代はそれじたいとして理解されるばかりでなく、却つて逆に資本こそ地代を理解せずには充分な理解に到達しない——「中世では資本そのものが——純粹の貨幣資本でない限り——傳統的な手工道具等としてこの土地所有的性質を帶びてゐた」のだから。かくて地代は資本を理解せずしては理解できないといふ命題はただ「資本が支配する（社會）形態においては」といふ前提の下でのみ、合理的である。「同一の範疇が、異なれる社會段階に於いては、異なれる地位を占むる」といふ認識、そのやうな差異性の質を規定する點に「經濟學の方法」があるといふ指適、これこそマルクスがこの節全體にわたつて繰返へし注意するところであり、さきにあげたこの節の結論部分が、要約してゐるところであつた。（かかる質の究局的規定は人々が知るごとく生產樣式の解明によつてあきらかにされる。だがそれについてはいま述べるところではない）。かくて經濟學なるものはつねにいづれかの特定發展段階上の生產樣式——生產關係——社會經濟的構成に固有な發展法則の學であり、換言すれば近代資本主義社

會の經濟學（狹義の經濟學）であるか、封建的理論經濟學であるか、古代的理論經濟學であるか、等々であつた（註）。だがまさにそのことのために個々の經濟學は、人類の物質的生產の「歷史的發展過程をその種々なる階相（ファーゼン）に於て追跡する」やうな別個の科學たりえない。この後のものは然らば個々の經濟學を單に積み重ねることで成り立つであらうか――もとより否。この後のものはすでに諸範疇じたいの具體的發展を扱はねばならぬ、といふ一事だけで「經濟學の方法」と矛盾せざるをえないのだから。

（註）エンゲルスは「反デューリング論」第二篇第一章で、これらの諸經濟學を總稱して、「前市民的・理論的經濟學」（die vorbürgerliche theoretische Ökonomie）といつてゐる。

「ブルジョア經濟學に對する如上の批判を完全に遂行するには、生產、交換及び分配の資本主義的形態を知るのみでは充分でなかつた。この形態に先行する又は　の形態と並んで未破達の諸國には今日なほ存在する諸形態もやはり、少くともその粗枝大葉だけは研究され、比較照合されなければならなかつた。かやうな研究と比較とは、今までのところ、大體において獨りマルクスによつて爲されたのみであり、從つて、前市民的理論經濟學の上で今日までに建設を



見たところは、殆んど全部彼の研究の賜であつた」（改造社全集第十二卷三二四頁）。同じ場所でエンゲルスが「廣義の經濟學」と述べてゐるものは、もしそれが「經濟學批判序說」に、「第一に、一般的抽象的規定が展開さるべきである。これらの諸規定は從つて多少すべての社會形態に通ずる。併し以上說明した意味に於いてではあるが」といふ場合の一般的理論でないとすれば、右にいはゆる「前市民的理論經濟學」を指すものであらうし、さうだとすれば既にそれは單一なる一個の經濟學たりうるものではなく、「狹義の經濟學」が資本制生產樣式を固有の對象として形成されるやうに、各經濟的構成に夫々固有な合法則性を追及するところの、相互に異なれる理論經濟學の體制をなすべきものであると考へられる。

マルクスは「經濟學批判序說」の初節の中でみづから設問していふ、「だから我々が生產といふときには、それは常に或一定の社會的發展段階における生產――社會的個人の生產を意味する。だから苟くも生產について語らんがためには、我々はその歷史的發展過程をその種々なる階相（ファーゼン）に於て追跡しなければならないか、あるひは前以て、我々は一定の歷

史的時代、從つて例へば本書本來のテーマたる近代市民的生産をのみ取扱ふことを明かにするか、その何れかであるべきやうに思はれる」と。そしてこれに對する彼自身の解答は、――「序説」全部が、いはば此の問題への解答として展開されてゐるのだが――後の方法のみが唯一の「經濟學の方法」たるべきものだといふにあつたことは、もはや説明するまでもないであらう。

これに對して、「生産について語らんがために……その歴史的發展過程をその種々なる階相に於いて追跡」する唯一の科學は、科學としての歴史記述の基根部門としての經濟史である。經濟學に於て對象の質的規定は諸範疇の歴史的規定性として與へられる。これが與へられてのち始めて諸範疇の歴史的展開が可能になるからである。いま狹義の經濟學としての「資本論」に就いて見よう。

資本論の固有の對象は、第一版序文で明瞭に規定されてゐるやうに「資本家的生産様式とそれに對應する生産及び交換の諸關係」であつた。このことは資本論が、「主體」とし



ての「近代市民社會」の運動法則を領得すべく、「經濟學の方法」にしたがつて、特にそれの「一般的照明」たるごとき生産様式を、そしてそれのみを、固有の對象として限定してゐることを意味する。現實の主體たる具體物としての近代市民社會は、「生産の最も發達せる最も多様なる歴史的組織體」であり、「すでに沒落し去つたすべての社會形態の廢墟と要素との上に築かれ、これら諸々の廢墟と要素は、或ひは未だ克服されざる遺物としてその中に餘命を保ち、あるひは單なる暗示にすぎざりしものが全幅の意義にまで發展してしまつてゐるといふ風である」。換言すれば、全複合體としての現實の近代市民社會の生産諸關係の中には、前時代から持ち越され、「一般的照明」の下に變色されつつ殘存せしめられてゐるやうな諸多の關係が含まれると共に、前時代の社會形態にあつては單に暗示にすぎなかつた要素が全幅の展開に到達して、この「照明」者たる位置に就いたものとして――資本制生産様式及びこれに對應する生産關係として存在する。だが資本論の固有の對象は、この後の決定者的關係にのみ限定されてゐるのである。

「だが現實の社會經濟的構成は決して「理想型」的に純粋なものではない。例へば封建社會の內部には從屬的なものとして前階級社會の生產關係や奴隷所有が殘存すると共に、やがて後には資本主義的生產關係が生成する。また資本主義社會の內部には多かれ少なかれ封建社會の遺制や、また往々にして奴隷制の遺物が殘存する。このやうに、一定の社會經濟的構成の質を規定する生產關係——その構成における支配的な生產關係——に從屬して、その社會構成の內部に存在するところの、舊い社會構成の遺制や、生成途上の新しい質の生產關係の體系は、ロシア語で特にウクラード（Uklad）と呼ばれる。このウクラードの存在によつて社會經濟的構成は何らかのモディフィケーションを受けるとはいへ、しかしそれは單なるウクラードがその社會の發展において決定的な役割を演じるといふことを意味しない。かかる役割を演じるところの生產關係はもはや單なるウクラードたることを止める」（永田廣志「唯物史觀講話」二四八—九頁）

他のウクラードを從屬せしめる支配的なウクラード、これは特定生產樣式に照應する



ところの生產關係であり、「生產樣式」である。蓋し生產力の客觀的要因たる生產手段と主觀的要因たる勞働力との結合樣式は、それじたいにおいて、生產力とその歷史的規定性たるごとき生產關係との、矛盾にみてる統一であつたから。〔なほこの點については永田氏前揭書二三八頁以下。ミーチン「史的唯物論」邦譯書一七六頁以下。ムシュペルト「資本論の對象」（「マルクス記念論集資本論研究」所收）等を參照。〕この意味において「生產樣式」の概念をもろもろのウクラードを含むところの「社會經濟的構成」の概念から區別することができる。前者は後者の本質であり、質的規定者であり、歷史的規定者であつた。「大づかみにいつて、アジア的、古代的、封建的及び近代市民的生產樣式をもつて、經濟的社會構成の progressive Epochen として徵示することができる」といふ場合の「生產樣式」と「經濟的社會構成」の、辯證法的關聯を見るべきである。

そこで資本論の固有の對象が「資本家的生產樣式」だといふことは、經濟學としての資

本論が所與の具體物としての近代市民的社會に、したがつてまた現實の市民的社會經濟的構成に、それじたい無關心であることを決して意味するのではなく、却つてそれを領得せんがための不可避的な限定であつたといふことは、右に述べたところから既に明らかであらう。かくて資本論は現實の市民的社會經濟的構成の全具體性を直接自己の對象とはしない。その中にウクラードとして含まれてゐるやうな「色々な歴史的形態の土地所有を分析することは本書の限界外に屬する」とマルクスは地代理論を起筆する（第三卷第六篇卅七章）。「……玆に展開するものとは異つた土地所有及び農業形態（「封建的土地所有なり、又は自家生計のために經營される小農的農業なり」）が從前存在してをり又は今尙ほ存在しつつあるとの主張を持出す者があるとしても、かかる主張は我々にとつては全くどうでもよい」。

資本論で扱はれる地代はもつぱら單一の歴史的範疇としての資本主義的地代――「農業上の資本制生産樣式及びこれに照應せる土地所有形態」のみに限られる。そしてこの特殊



歴史的な地代範疇の本質が餘すところなく規定されてのち――資本論第三卷第六篇の最後の一章を除く全部。それにつけても本質を規定するといふことはいかに多難な複雜な分析の行程であるか！――そののち始めて、この本質の歴史的始源が問題とされ、既に本質が知悉されてあるといふ前件に據つて始めてこの問題の解決が可能となる。「資本制地代の發生」の章が第六篇の最後に位置するはこのためである。「本書の限界外」に置かれた本來的地代の諸形態はこの最後の手順の場所で呼び歸へされる。だが、なほまだそれじたいのためにではなく（その任務を負ふものは封建制理論經濟學である）、却つて實に「資本制地代の發生」を明らかにする目的のために。

地代についていま述べたところは、同時に資本論で扱はれてゐるすべての範疇の各々について、及び資本論全體について、殘りなくあてはまる。たとへば第一卷第一篇第一章「商品」に於いて、そのための歴史的展開が省察されるのは最後の節「商品の魔術性及びその秘密」に於いてであつた。さらにたとへば、資本家的生産樣式そのものの歴史的展開

（手工業からマニュファクチュアへ、さらに大工業への發生及び發展の序列）は、既にその本質が分析され終つてのち、はじめて第四篇に於いて與へられてをり、さらに進んで、資本家的生産様式が發生するための歴史的前提條件の究明は資本の生産行程を扱ふ第一卷がまさに終らんとするところで（第二十四章いはゆる本來的蓄積）はじめて與へられるといふ風に。

諸範疇の歴史的展開はいつでも最後の到達點としてあらはれてゐる。「人類生活の諸形態に關する思察（ナッハデンケン）、隨つてまたこれが科學的の分析は、總じて現實に於ける發展に反對した進路をとる、それは後方から（post testum）、すなはち發展の完成された形態を以て、始まる*」とマルクスはこれを定式づけてゐる。「研究とは材料を細大洩れなく領得し、その種々の發達形態を分析し、これらの形態の内部的紐帶を探究することである。そしてこの仕事が完了して後、はじめて現實の運動は適應的に叙述されうる**」といふ場合も同様である。叙述に於ける、即ち概念に於ける、諸範疇の展開は、すでに諸範疇の本質が研

239294



究を通じて領得されたのちに於いては、諸範疇の現實的歴史的運動に適應したものでなければならぬ。だが、諸範疇の本質に到達する研究の順序は、これと反對に「後方から、すなはち發展の完成された形態を以て」始まらなければならない。

マルクスは資本論第一卷で資本制生産様式それじたいの史的展開を與へるところで、「他の生産様式に於けるよりは多數の勞働者が、同時に、同じ場所で（或ひは同じ勞働範域で、といつてもいい）同一種類の商品を生産する目的を以つて同一なる資本家の命令の下に働くといふことは、歴史的にも、概念的にも、資本制生産の出發點を成すものである」と記してゐる。「生産様式それじたいについていへば初期のマニュファクチュアの如きは、同一の資本に依つて、同時に多數の勞働者が使用されるといふ一事を除けば、殆んどツンフト的手工業と異なる所なく、ただツンフト親方の作業場の擴大されただけのものに過ぎない***」

ところで「歴史的にも概念的にも」協業から、最初期の資本制生産様式たる端初的マ

ニュファクチュアから、出發する、といふ仕方は、資本制生産様式の本質――歴史的規定性としての――に到達するための研究の方法・分析の順序・さきに繰返へし述べた「經濟學の方法」・資本論じたいがその篇別を以て定式化してゐる順序・のまさに逆のものであつた。「資本制生産様式」の本質を領得するための「經濟學」的分析は、したがつて篇別は、決して「協業」からは始まらない。前の仕方は後の仕方の成果として與へられる。といふ點に兩者の統一が認められる。

* 資本論第一卷、改造社版、上、四五頁。

** 同、第二版序文、同上、一四―五頁。

** 資本論第一卷、改造社版上、三〇一頁。

最後に資本論全體についても同じことがいはれる。資本論の對象は「資本家的生産様式及びそれに照應する生産及び交換關係」のみに限定されてゐた。だがこの限定された對象の總行程に於ける內的關聯があきらかにされることで「近代市民社會の經濟的運動法則を



闡明する」といふ資本論の「究局目的」(第一版序文)は一應達成されてゐるのである。

もつとも、ここに「一應」といふのは、資本論が現實にはなほ豫定の篇別を終へず、資本制生産様式を表現する基本的階級それじたいの叙述に立到る直前で中絶されてゐるためである。階級對立は資本論に限定された對象のための最終の仕上げであり、特定生産様式の內在的矛盾――生産力と生産關係の矛盾――に基く固有の發展法則は、最後に固有の階級關係の發展法則として仕上げをうけるべきであり、すべての「廣義の」經濟學卽ち封建的、古代的等の各理論經濟學にとつても同様でなければならぬ。しかしそれは最後の仕上げにすぎない。なぜなら、資本論に於ける出發點を成してゐる商品をとつてみても、所與の階級關係を前提としてもつてをり、この前提は商品分析の到達點として與へられてゐるからである。具體的諸前提が、すべて「經濟學の方法」においては、諸分析の到達點として與へられる、といふ點に、これまで述べたところの一切の意味が集約される。歴史の對象をなすものは最も具體的な具體物としての歴史的現實性であり、かくの如きものが史學

にとつての前提である。このいみで對象とは總じて前提であるといへる。かくて經濟學は史學と同じ具體的諸前提に到達するための、頭腦にとつて唯一に可能な方法に於ける第一着手、第一階梯の位置における科學領野として理解される。經濟學にとつての固有な對象が、具體的總體の中からその「照明」者的存在たるもののみに規定されるゆえんも、ここにあつたのである。

## 三　經濟史の方法と經濟學の方法

資本論が全篇別の終局において、及び各卷の、各篇の、各章の、多難な分析の途の各最後において、限定された夫々の範疇の運動規則及び運動形態に到達してゐるといふことを以て、ただちに資本論がそのまま「史學的著作」であると、云ひうるであらうか？　マルクス五十年祭記念論集に收められてゐる「歴史研究の指針としての資本論」と題する論文の中でネチキナは下の如く述べてゐる。



「資本論は一の經濟學的研究である。　ところで資本論が經濟學上の研究であるといふ所から、資本論が歴史家にとつて有する意義を見定めるに當つて、或は次のやうに云ふ者があるかもしれぬ――資本論には經濟學的意義以外に他の方面――歴史的方面――がある、資本論には歴史に捧げられた特別の部分があると。

この主張は一見眞理らしい外觀を呈してゐるけれども、實は極めて不正確であり從つて誤つてゐるといはねばならぬ。資本論の史學的意義を評價するに當つての全困難はほかでもない次の點にある。それは資本論は理論經濟學上の研究たると共に、それと同時に史學的著作であるといふ事だ、資本論の何處か或る一方面が史學的なのではない、さうではなく資本論の全體がそのままそつくり史學的なのである。このことはいふ迄もなくマルクス主義の理論が歴史主義によつて貫かれてゐるといふこと、それは元來歴史理論であるといふことと、極めて密接に聯關してゐる。まづ此の事を明瞭にしたうへ、然るのちに資本論中に勿論存するところの、そしてどうしても歴史家が深く研鑽しなけれ

ばならないところの、個々の特に歴史的な叙述について論じなければならぬ」（力點原文、邦譯「資本論研究」六八頁）

「資本論全體がそのままそつくり史學的だ」といふ命題と、「個々の特に歴史的な叙述」があるといふ命題との辯證法的關係を、ネチキナはこの引用部分でも、また爾餘の全部を以てしても、遂に充分には明らかにしてゐない。その結果として、「資本論は同時に史學的著作である」といふ命題だけが、謎のごとく人々の頭に殘る。むしろ同じ論集に收められてゐるムシュペルトの「資本論の對象について」の研究こそこの謎を解く鍵を與へてゐると思はれる。ムシュペルトはそこで、資本論が特に資本家的生産様式を限定されたる對象としてもつことは、「近代（市民）社會の經濟的運動法則を闡明する」といふ究局目的のための、いかに唯一に方法的な仕方であつたか、といふ問題をめぐつて考察してゐる。だが豫定の紙數もあり、私はここでムシュペルトに立ち入つてゐることはできない。



所與の現實的な社會經濟的構成――近代市民社會の具體的な經濟的構成の認識に到達するために、狹義の經濟學は「一般的照明」者たるごとき資本家的生産様式の解明に終始する。それにもかかはらず資本論の全卷において、各篇及び各章の最後において、資本制生産様式の外部に立つところの、本來資本論の範域の外にあるところの、そして現實の近代的社會經濟構成の總體の内部にもろもろのウクラードとして含まれるところの經濟的諸範疇が扱はれてゐる所以は、資本論本來の對象たる諸關係諸範疇の歴史的發生、發展及び消滅の諸形態を問題とするためであつた。これは經濟學においてはつねに最後に問題とされ、方法上の到達點として與へられる。本來もつぱら資本家的生産様式の解明に限定されてある筈の資本論の中でたとへば封建的生産様式の解明が――即ち封建的生産關係のための理論經濟學が――最も集約的な形で與へられ、含まれざるをえない必然性がそこに見出される。かくて近代的生産様式の經濟學としての資本論は、同時にまた、一たん自己の限界外に規定したところのウクラードの本質を解くための理論的な「鍵」――その各々を獨立に

展開するとき古代的・封建的等の各理論經濟學の完成形態が與へられるやうな――を殘りなく與へてゐる。だが、繰返へし注意したやうに、これらすべてはいづれも經濟學の構成及び方法における限界點・到達點に於いて在つたのである。

この限界點・到達點から改めて出發するもの――所與の具體物の具體的認識に到達する學問的行程の序列に於いて、出發點としての經濟學が終るところから改めて始めるもの、これは經濟史である。經濟史は經濟學の總成果――それは、既に見たごとく、それ自體の中に必然的に古代制・封建制經濟學等を含まざるをえないやうな近代制經濟學の體系である――を受けとつて、現實の社會的實在に立ち向ふ。

學問的認識の序列におけるこのやうな順序を、再び夫々の學問に固有な對象規定の問題として見るならば、經濟史學に固有な對象は、現實的總體性における社會經濟的構成であるといはれよう。ウクラードは經濟學の範圍外におかれ、限界點において省察された。經濟史學はしかし、すでにまともにウクラードを問題にしなければならぬ。



ウクラードは何よりまづ先行諸形態からの遺物として存在する。これら遺物は、資本家的生產樣式の「照明」下に立つことで、ひとしく資本制的諸關係の一色の外見を帶びてゐるにもかかはらず――例へば殘存せる封建的地代が表象の上では資本制的利附資本の利廻りと比較されて地價の決定に導く場合のやうに――その非資本主義的本質に於いて析出されること、資本制地代の解明が、當該篇別の終局において、あらゆる解體の段階における本來の地代形態の解明に到らせるのと同樣であらう。この解明は、理論的には、資本家的生產樣式及び生產關係の發生及び發展の側面として究明されるが故に、それじたいにおいて、特定生產樣式を對象とする理論經濟學の「究局」的限界――端初的出發ではなく――をなしてゐる。資本論に含まれてゐるいはゆる「歷史的部分」なるものは、このいみで何ら特に史學的部分ではありえず、却つて經濟學の限界部分たるにすぎない。だが經濟史の仕事はこの限界から出發する。かつ經濟史はウクラードをその現實的な發展行程に添うて敍述しなければならぬ。經濟史に於ける篇別と敍述の序列は、すでにあくまでも諸範疇じ

たいの具體的運動法則に則したものでなければならぬ。

同じ近代市民社會を扱ふに當つて、經濟學は資本家的商品の分析から出發して土地所有からは出發せず、土地所有はむしろ全卷の分析の一應の歸着點を形成してゐるのだが、經濟史に在つては土地所有からむしろ始めなければならない。レーニンが「ロシヤに於ける資本主義の發展」の篇別を以つて示してゐるやうに、具體的なロシア近代市民社會の經濟史的分析は、封建的土地所有の解體の測定を以て始まる。それは資本家的生產樣式及び關係の敍述から始めるのでなく却つてそのための歷史的諸前提の解明から始まつてゐる。資本論における理論的到達點、限界點の一切が、「發展」における方法的開始點をなし、敍述と篇別の逆の序列を規定してゐる。論者の間で可逆法または倒敍法と稱せられてゐるものは經濟學に固有な方法であつて既に經濟史の方法ではない。これを不當に史學從つてまた經濟史學の方法にまで一般化すると神祕主義に到達する——現代から過去を構成するといふ仕方は、却つて觀念論史學の定法であるだらう。故にマルクス自身、この種の不當



な適用をいましめて、「所謂歷史的展開」または「辯護的」史述法と經濟學に於ける可逆法と同一視すべからざる所以を述べたのである（註）。

（註）「いはゆる歷史的展開は、一般に最後の形態が過去の諸形態を自分自身に對する段階として觀察し且つそれらをつねに一面的に理解する、といふことに基いてゐる、蓋し最後の形態は稀に、かつ一定の條件の下においてのみ、自己を批判することができるのだから」（經濟學批判序說）

扨經濟史に於いてはもろもろのウクラードがまともに取扱はれねばならぬといふことは、經濟史が經濟學と異つて既に與へられたる全具體性における社會經濟的構成を對象とするからであつた。だから經濟學の一應の仕上げとしての位置にある階級構成にしても、經濟史に於いては最早特定生產樣式に本具的な基本的諸階級のみでなく、與へられてゐるすべての階級及び階級分派が、析出され彫琢されてゐなければならない*。經濟史は、その方

法がまさに經濟學の逆の仕方、諸範疇をその歴史的發展の行程に添うて展開するといふ仕方によつて、よくこの任に耐えうるのである。その場合、經濟史のこの仕方が可能になるのは、經濟學の成果を自己のものとして既に受取つてゐるがためにほかならない。

＊　かくてまた、さきにもつぱら殘存物としてのウクラードについて述べたところは、同樣に特定社會經濟的構生の内に孕まれる新たなる萠芽的生産樣式としてのウクラードにもあてはまる。第三のウクラードの概念として、論者は特定生産樣式それじたいの内部的各發展段階――たとへば資本主義的社會經濟構成に於けるマニュフアクチア時代、大産業時代及び帝國主義時代等を數へる。これらは各異別なる生産樣式を示すものでない、といふいみでウクラードとして概念されてゐるのである。しかし、これら諸時代はさきに資本論について見た如く經濟學そのものの究局的到達點として――資本制生産樣式の運動法則じたいとして、必然的に與へられなければならない。これら諸段階から抽象したやうな資本制生産樣式なるものは、すでに内的發展の法則性から抽象された一片の觀念にすぎないだらうから。かくて第三の意義におけるウクラードは當然經濟學によつて與へられる。しかし經濟學はそれを依然としてただ純粹型に於いてのみ、即ち遺物等々としてのウクラードから作用されない、また作用されないままでそれじたいとして理解されるところの發展段階及び形態として、與へるにすぎない。經濟史はこの經濟學の到達點から出發して、全複合的形成に於ける――たとへば――帝國主義段階の社會經濟的構成の認識におもむく。

かくて經濟史に於て與へられた具體物は經濟學の場合よりもより豐富な質的規定性に於ける具體物である。そして、より豐富たりうる所以は、經濟史に於ては具體物はすでにその史的展開の行程に應じて與へられるといふことから得られたものであつた。

ついでながら、經濟學に於ける固有の對象――全研究の到達點として與へられる資本制生産樣式の全姿としての純粹型資本制社會經濟的構成――は、いはゆる「上部構造」を含むか、含まないか、といふ問題が論ぜられてをり、最近の論者は總じて「含む」といふ見解を表明してゐる（例へばミーチン。「社會の根底をなす經濟的制度だけでは、まだ社會的經濟的構成といふ概念を全部云ひ盡してはゐない。……經濟的基礎とそれに對應する上部構造……との具體的統一において のみ、各々の社會經濟的構成は、或る全體的なものとして、生きた「社會的生産有機體」として

現はれる」。邦譯九一―二頁)。この「含む」といふ意味は、しかし、「經濟學批判序說」でマルクスが經濟學の篇別として示してゐる構成の意味において理解さるべきであらう。即ち「第三に、市民的社會の國家形態への包括。それ自體に關してのみ考察される。「不生產的」階級。租稅。國債。公信用。人口。植民。移住。第四に生產の國家的關係。……」。

このいみで「含む」。このことは經濟史の場合も同樣である。經濟史は、ただ、それらすべてを史的展開の序列に應じて展開する、といふことから、一層豐富な具體物に到達するにすぎない。

既に經濟史で到達される具體物は、まさにこの意味で上部構造をも、それじたいに關してのみ考察しつつ含むものであり、第二に、前期形態からの遺物としてのウクラードを含むところの全具體性における社會經濟的構成であり、第三に、特定生產樣式の各內部的發展段階としてのウクラード――たとへば帝國主義的段階――にしても、經濟學に於いてのやうにその純粹型に於いてではなく歷史的具體性において把握されたものであり、最後に、かくて特定の現實的な社會經濟構成の全姿をその先行物からの轉化――發生、發展及び消



減に於いて、即ち歷史的發展の全環との關聯に於いて追跡するものである。そしてこれらすべては、經濟學が經濟史の方法であり經濟史は經濟學の實現であるといふ關聯からして、既に質的に規定された諸關係の歷史的‖發達史的綜合として、與へられてゐるのである。

だから、經濟史に固有な對象として到達される具體物は、すでに史的發展の行程に照應しつつ領得され、それゆゑに全複合性において領得されたところの、且つ所與の全複合體としての歷史的實在にとつて語の眞實の意味で「土臺」と云はれうるところのものであり、一切の歷史記述はそこへつねに立還り、そこからつねに再出發する。

エンゲルスは、マルクスの最初の歷史記述的著作たる「フランスに於ける階級鬪爭」への緒言のなかで、歷史記述と經濟史との如上の關聯について、下の如く記してゐる。

「ここに新たに出版される著作は、彼の唯物論的見解によつて、時代史の一片を、與へられた經濟狀態から說明せんとする、マルクスの最初の試みであつた。……

日常の個々の事件および事件の連續を判斷するにあたつて、最後の經濟的原因にまで溯ること

は、とうてい不可能であらう。……或る一定時期の經濟史に關するはつきりした鳥瞰は、同時代には決してこれを得ることが出來ないで、ただ後日になつて、材料を蒐集しこれを擇りわけて、初めて得られるものである。この場合、統計は必要欠くべからざる補助手段ではあるが、いつもそれは歴史の後から跛行的について行くものである。

從つて、現に經過しつつある時代史を書くためには、この最も決定的な要因を恒久的なものとし、當該時期の初めにあつた經濟狀態を、全時期に亙つて一定不變のものとして取扱ふか、ないしは、明白な事件自體から發生し、從つて同樣に明々白々な經濟狀態の諸變化のみを斟酌することを、しばしば餘儀なくされる。であるから唯物論的方法は、この場合しばしば、政治鬪爭を、經濟的發達によつて與へられた社會階級間および階級分派間の利害鬪爭に還元し、かつ個々の政黨を、これらの階級と階級分派とに多かれ少なかれ照應する政治的表現として指摘するだけにとどまらざるを得ないだらう。

研究すべき全過程の實際の基礎であるところの、經濟狀態の同時代的諸變化が、かやうに不可避的に閑却されることが、誤謬の源泉となるべきことは自明である。……マルクスがこの著述に着手した當時は、上述の誤謬の源泉は、さらに一層避くべからざるものであつた。……かやうな



不利な事情にも拘はらず、彼はよく、二月革命以前のフランスの經濟狀態、並びに二月革命以後のこの國の政治史の精確な知識によつて、事件の記述――それは事件の內的關係を、それ以後といへども比類を見ぬやうに暴露してをり、またそれは後年マルクス自身による再度の試驗にも、立派に通過したものである――を與へることができた。

第一回の試驗はマルクスが一八五〇年の春以來、再び經濟研究の閑暇を得て、先づ第一に、最近十年間の經濟史に着手した結果だつた。この研究によつて、從來彼が不完全な材料によつて、なかば先驗的に推論してゐた事柄が、事實そのものによつて、彼に完全に明らかになつた。すなはち、一八四七年の世界的商業恐慌が、二月及び三月革命の眞實の母であつたこと、且つまた、一八四八年の中頃から漸次に恢復し、そして一八四九年及び一八五〇年には全盛に達した產業上の繁榮が、力を新たにしたヨーロッパ反動の更生力であつたといふことこれである。これは決定的なものであつた。……」（改造社全集第五卷、九―一〇頁）

ここでは最も限られた意味での經濟史について述べられてゐるのだが、それにも拘はら

ず歴史記述と經濟史との間の基本的な依存關係について述べられてゐる。一たん書下ろされた歴史記述をより精細に「試驗」するための「最近十年間の經濟史」の役割、これは歴史記述にとつての最後の仕上げに於ける經濟史の役割を物語つてゐる。だが、さらに肝心なことは、「最近十年間」の最後的に精細な經濟史が得られてゐない不充分な諸前提のもとで、當該期間の特定事件を史述せしめ得た方法的前提じたいもまた經濟史であつたこと――即ち「二月革命以前のフランス」の經濟史であつたといふことこれである。事件が進行しつつある當面時期の經濟史に、事件發生以前の經濟史が方法的に代行する。「この場合しばしば、政治闘爭を、經濟的發達によつて與へられた社會階級間のおよび階級分派間の利害闘爭に還元し、かつ個々の政黨を、これらの階級と階級分派とに多かれ少なかれ照應する政治的表現として指摘するだけにとどまらざるをえない」といふ場合、方法的前提として依據されてゐるもろもろの階級及び階級分派の關係の總體なるものは、すでに所與の現實的社會經濟構成に含まれるすべてのウクラードに關してをり、その發展の特定小段



階を表現する一定の配置におけるものであり、經濟史としてのみ與へられる形相であつたのである。

歴史記述と經濟史との間のかくの如き直接的依存關係は、「主題」がいかに限定さるると、擴大さるるとに論なく、原則的なものであつた。蓋し經濟史とは、本來、最も根源的な歴史記述にほかならず、歴史記述にとつての基幹部門たる位置におるからである。

從つて經濟史に於いても史的對象は無限の量的限定において、即ち「主題」に於いて把捉されうる。この場合しかし對象はすでに質的規定性に於いて領得されてゐる――既に最早經濟學的處理を經過してきてゐるがために。ところで、質的規定性に於いて把握された對象の量的限定の最高限界は、歴史記述の基幹部門としての經濟史にあつては、いはゆる發展段階の理論を構成する。さきに經濟學の方法に於いて否定されたところの「生産の歴史的發展過程をその種々なる階相に於いて追跡する」といふ課題ははじめてここで果される。蓋し、「經濟學批判序文」の公式に於いて社會經濟的構成の前進的諸時代としてあげ

られてゐる所のたとへば古代的、封建的及び近代市民的生産様式の夫々の歴史的規定性に於ける質的規定は、この各々に照應する各理論經濟學の分析が與へるところであるけれども、事物の本質に到達するための經濟學に個有な可逆的方法――もしくは上昇的方法――の故を以て、各理論經濟學の單なる總和によつては發展段階の理論は形成されえない。この點を判り易くするためにはつぎの例で充分であらう。マニュファクチュア時代なるものは狹義の經濟學が資本制生産様式じたいの端初的發展段階として規定するところであつた（そして經濟學の限界内ではこれ以上の規定は與へられない）。しかるに封建的社會經濟構成から資本制構成への現實の轉化にあたつて、このマニュファクチュア段階としての資本制生産様式は、封建的社會經濟構成に孕まれるウクラードとしての存在から發展して、すでに實質に於いて他に對するいかなるウクラードでもなく、さりとてまた他をウクラードたらしむる照明者としての位置をも確立するにいたらないやうな――かかる位地を確立するものは大産業時代への轉化であつた――ある過渡的な段階を形成し、この段階に照應す



る特定階級關係・一方で土地所有者階級他方でマニュファクチュア市民階級・の均衡の上に、過渡期の政治形態としての絶對主義が形成される*。かくのごとき、經濟史的意味に於けるマニュファクチュア時代、從つてまたそれに照應する政治形態の理解は、過渡期の社會經濟的構成の全複合性における把握からしてのみ與へられるところで、もつぱら特定生産様式のみの自然史的合則性の解明に終始する理論經濟學の究局的限界點から出發するところの、歴史認識の手續きに於ける經濟學のパトンの繼承者たる經濟史によつて、はじめてよく與へられるものであつた。ここにあげたマニュファクチュア時代の事例に代へるに、人はブルジョア革命のもろもろの型はいかにして規定されるか、といふ事例をとつて考へることもできやう。いづれにしても、經濟史の最高限界としての發展段階の理論は、個々の理論經濟學が歸結するところの各々の生産様式の質的規定を、單に再敍述し單に積重ねることで得られるやうな、御手輕なものではありえない。

* 拙著「明治維新史」初版本所收「絶對主義論」を參照。

# 第三章　史學分類及諸問題

「歴史を體系的に概念によつて區分することは、わが史學の素材がこれを許さない。歴史の諸事實は實に時間と空間とにおける諸變化であるから、これら兩關係に從つて素材を區分するのが最も一般的な方法で、かつ時の順序が主として決定標準となるやうである」*

＊　ベルンハイム「歴史とは何ぞや」第二章第二節。

客觀的な方法をもちえない史學にとつては、眞に方法的な史學分類もまたありえない。そこで「素材による區分」といふ、彼らみづから認めて便宜的・非方法的とせざるをえない分類を以て滿足する。「絶對的で且つ永久に妥當する歴史素材の區分といふやうなものは、素材そのものの性質上ありえない」。對象の無規定性は、ここでは素材の無規定とし



て、さらに素材の無規定性が史學分類の無規定性として、正直に表明されてゐたのである。

唯物論史學の理論のみが、眞に方法的な史學分類を與へうる。蓋し史學分類とは、抑々方法からの要約でしかないのであるし、さきに論じたいはゆる對象規定の、より詳細なる再規定にほかならないから。

## 一　經濟史

經濟史が歴史記述にとつての直接の方法的基礎であり、かかるものとして歴史記述のそれは基幹部門を構成することを、既に述べた。

經濟史の最高限界としていはゆる發展段階の理論があることを既に述べた。この理論は、それに到達するための前提たるいはゆる「廣義の經濟學」――資本制生産様式を對象とする「狹義の經濟學」から區別された「前市民的理論經濟學」すなはち封建的・古代的等の各生産様式を對象とする夫々の理論經濟學が未完成であることからして、今日なほ完全な

形態に於いては與へられてゐない。最近數年の間に嵐のごとく捲き起され、歷史科學界の寵題目となつてゐるところの「**アジア的生産樣式**」の論爭が、最も端的にこれを語つてゐる。たまたまこの問題は、經濟學および經濟史が歷史記述のためにいかに不可缺な前提であるかを、一切の唯物論的史家にいやといふほど納得させる。記述學派史學にとつては——むろん記述學派經濟史學にとつても、「アジア的生産樣式」はなん等問題たりえない。なほ不充分な形態に於いて見出される唯物史觀的發展段階の理論が、舊史學に於ける一切の恣意的な同似物に對してはすでに存分に充分な科學的理論構成たりうる理由がそこにある。「アジア的生産樣式」の論爭じたいに觸れることはしかし本稿頁數の限度外にある。

發展段階の理論は經濟史の最高限界である。これに對して各發展段階を表明する特定社會經濟的構成じたいの限界內における個有の發展諸時代の經濟史が存在する。これと、經濟學によつて到達された純粹型に於ける各時代の形態區別とは、必ずしも同一でないことを前に述べた。この不同性の故に、同一發展時代が異なれる諸條件の下にとるところの一



定數の型制をあきらかにするやうな、そのやうな任務を帶びたこの部門の經濟史が存在する。

エンゲルスが「フランスに於ける階級鬪爭」のために關說した場合の經濟史は最も限定された最狹義に於けるそれである。けれどもかかる一國の、特定十年間の經濟史にしても、それじたい世界史的ひろがりに於いて與へられるといふことは、生産の資本主義的發展段階と共に愈々必然的なものとなる。このほか夫々の「主題」に應ずるもろもろの個別經濟史が存在するが、「主題」の根底に一の具體的全體がつねに把握されてゐなければならないこと、多言を要しない。

最後に、現實の經濟史の反映としての經濟學說史——現實の經濟史の多かれ少なかれゆがめられた反映としての諸經濟學說の批判的歷史的展開。かかるものとしての「剩餘價値學說史」が、資本論の本來の「第三卷」として篇別されてゐた。「經濟學であると同時に歷史記述である」といふネチキナ流の見方にあつらへむきなものは資本論ではなくてまさ

にこの剰餘價値學說史であらう。それはブルジョア經濟學說への直接的批判としてそれじたい理論經濟學にぞくしてゐるし、イデオロギーとしてのブルジョア經濟學說の歷史的展開であるといふ意味では同時に歷史學にぞくしてゐるのだから。ところで、これはすでにイデオロギーの歷史として、哲學史宗教史等と同樣に級別さるべきもので、特に經濟史のところで擧げるにふさはしからぬものではないか？　私はしかし敢へてこれを經濟史の中に數へねばならない。多かれ少なかれ經濟學說といはれうる種類のものが近代市民社會の形成につれてあらはれはじめて以後といふものは、このイデオロギー部門を省察することなしには眞に具體的な近世經濟史は書かれえない。ところで、宗教史文學史等のイデオロギーの歷史のはうは、時代の近世・封建を問はず、すでにして經濟史なしには存在しえない。



## 二　「上部構造」の歷史

「政治・法律・科學・等々の、藝術・宗教・等々の歷史なるものはなんら存在しない*」

＊「ドイツチエ・イデオロギー」岩波文庫版一三三頁。

だから私は、ここに「上部構造」の歷史なるものを、史學基幹部門として述べた經濟學のつぎに、機械的に分類するつもりはもつてゐない。ただつぎのことを云はんがためである。

「これら生產諸關係の總和は、社會の經濟的構成、すなはち法制上の及び政治上の上部構造がその上に立ち、特定の社會意識形態がそれに照應するところの、現實の土臺をなす」といはれる場合、第一に、社會經濟的構成の概念は上部構造をあつさり除外せるものでなく、それじたいに關して考察しつつ（in Beziehung zu sich selbst betrachtet）含んでゐるといふこと（既にこれを述べた）。從つて經濟史に於いても、かくのごとき限定された

關聯に於ける上部構造の歴史は不可缺の要素として組みこまれてゐること（これも簡單に述べた）。第二に、上部構造及びイデオロギーの歴史は經濟史に立ち還へることによつてのみ與へられるが（上掲、「……等々の歴史なるものはなんら存在しない」）、その場合銘記すべき一事は、上部構造の歴史は經濟史の實現形態たる位置におる、といふことである。歴史記述學の本論は、本來ここからはじまるといへよう。

私はさきに、對象としての歴史的具體物を科學的に領得する序列において經濟學は第一階梯であり、經濟史は經濟學の實現形態であると述べた。もしも自然辯證法が、自然認識における世界觀的契機の科學的成果として、エンゲルスが論じてゐるやうに各々の自然科學分野の認識論的序列を與へるものであるとすれば、歴史認識に於ける世界觀としての史的唯物論の課題としても、歴史諸科學に對する歴史認識論的序列を規定することが、與へられてあるにちがひない。私はこの問題を基底に置きながら、本稿を辿つてきたものである。しかし私は、この問題をなほ充分には考へ切つてゐないし、況んや敍述し得てもゐな



い。はやいはなしが、私はこれまで經濟學以外の社會科學の位置については殆んど何一つ述べてゐないが、經濟學に就いてより詳細に論じることなしには、爾餘社會諸科學の問題には立ち入ることができないであらう。しかしここではむしろ經濟史以降の關係が重要なのでめる。上部構造の歴史は經濟史の實現形態である――といふ意味が正當に理解さるるための前件たる限りで經濟史と經濟學の關係をあらまし見たにすぎないのである。上部構造の歴史が經濟史の實現形態だといふことは政治史について、たとへば「ブリュメール十八日」エンゲルス序文の中でつぎのごとく述べられてゐる。

「フランスは、歴史的な階級闘爭が、その他のいづれの國よりも、いつでも決定的に闘はれた國であり、階級闘爭がそのうちに行はれ、またその結果が要約されるところの、變轉しゆく政治形態が、最も鮮明な輪廓で刻印されてゐる國である……

……歴史の運動の大法則を最初に發見したものはマルクスその人であつた。即ちこの法則によれば、一切の歴史上の闘爭はよしそれが政治上・宗教上・哲學上ないしは其他の觀

念上の領域に起らうとも（上部構造の歴史）、實際においては、それは社會階級の闘爭の多かれ少なかれ明白な表現にすぎないものである（經濟史）、そしてこれらの階級の存在と、從つてまたその衝突とは、さらにその經濟狀態の發達程度により、その生産の性質及び方法と、これによつて決定せられる交換の方法とによつて、制約せられてゐるものである（經濟學）。この法則は歴史にとつて、かのエネルギー轉換の法則が自然科學に對する意義と同一の意義をもつてゐる。そしてこの法則こそ、ここでも彼に、フランス第二共和政の歴史を理解する鍵を與へたのであつた（括孤内引用者）*」

また同じ著作に對する著者序文の中では、

「最後に私の希望することは、本書が、今はなかんづくドイツに流行してゐるいはゆる『シーザー主義』なる冗言を一掃するために貢獻せんことである。人々はこの淺薄な歴史上の類似によつて、古代ローマにおいては階級闘爭はただ單に特權的な少數者の内部においてのみ、即ち富裕な自由民と貧しい自由民との間においてのみ行はれ、人口中の多數を



占める生産的大衆、即ち奴隷は、この闘爭のための、ただ受動的な踏臺たるにすぎなかつたといふ、主要な事實を忘れてゐる。人々は、ローマのプロレタリアートは社會の費用によつて生活した、しかるに近代の社會はプロレタリアートの費用によつて生活してゐる、といふシスモンディの意義ある言葉を忘れてゐる。古代の階級闘爭と近代の階級闘爭との、物質的、經濟的諸條件は、かくも完全に異つてゐるときに、その政治上の産物もまた、カンタベリー大僧正と祭司長サムエルが共通性をもつ以上には、互に共通なものをもつことはできない**」

* 改造社版全集第五卷一二五—六頁。

** 同上、一二八頁。

なほ、上部構造やイデオロギーの歴史に關聯して、「經濟學批判序説」の最終節が參照さるべきである。その第二項で從前の觀念論的歴史記述に對する分類による批判が與へら

れてゐたことは前に書いたが、自己の「現實的歴史記述」のための斷片的ではあるが積極的な方法的展開の試みがそれに續いて與へられてゐる。そのうち上部構造やイデオロギーに關聯してゐる部分としては、

第六項で「物質的生産の發展と、例へば藝術的生産の發展との、割合の等しからざること」。「いかにして法律關係としての生産關係が等しからざる發展を遂げるか」。等。

第八項では、右のうち特に藝術の問題についての詳説。

ところで第七項「世界史」の問題、第八項「出發點としての自然的規定性」の問題等は、上部構造の歴史から普遍史への展開に關聯する。

## 三　普遍史または一般史

相川氏「歴史科學の方法論」の企圖が發展段階の理論の展開としての經濟史にあたるとすれば、グーコフスキー「前資本主義社會史」の企圖は普遍史又は一般史の構成であるといへるだらう。總體性が上部構造の歴史にまで具體化されてある、といふ點に、この兩著の企圖に於ける方法上の差別があるであらう。第一章第三節末「前資本主義社會史」篇別を參照。經濟史の實現形態としての上部構造等の歴史が、一方でここにいふところの普遍史又は一般史の形態をとると共に、他方で「主題」的に無限に分化するところの形態をとることは、經濟史の場合、のべたのと同樣である。

## 四　特殊歴史

かくて、特殊史の問題はむしろ「主題」の撰擇はいかにして規定されるか、といふ事に歸するだらう。歴史家は任意に、自己の好みに應じて、いかなる主題をも撰ぶことができるやうに見える。「東洋史」であらうと、「國史」であらうと。また國史ならば國史で、鎌倉時代であらうと、明治維新であらうと。さらに「專攻」を求めるならば、幕末維新における特に立憲思潮を、特に外交關係を、特に農村史を、等々。

これらすべてはしかし、果して自由なる撰擇たりうるものであらうか。大學の研究室で主任教授から然るべき主題を割あてられるといふ事情を以て、「撰擇の不自由」の實證となすものではもとよりない。私が問題としてゐるものはかくのごとき撰擇の「不自由」ではなくて、却つて眞實に自由なる主題の撰擇のことであり、主題撰擇にあたつて歴史家が內在的に嚮導されるところの、客觀的な規準の問題であつた。この規準を與へる史學部門として、すべての歴史家に、かつすべての「專攻」に於ける歴史家に、殘りなく課せられてゐるといふ意味で「基礎」的な史學部門は一國の現代史である。一切の舊き歴史哲學なるものはこの事實に對する逆さまの形態での表出として見られる。ヘーゲルの歴史哲學が「新ドイツ帝國建設」を前觸れする就中時代的、就中國民的な性格のものであつたやうに。科學としての史學といへどもこの事實から解放されることはできない。ただ表出が轉倒しないまでのことである。



## 五　「歴史研究の方法學」

以上の史學分類の途上に於いて、同時に我々は、ブイコフスキー的課題に於ける「歴史研究の方法學」のための基礎的部分をも、すでに經過したものと考へる。この謂を一度にあきらかにするためには、さきに第一章の最後の節で、わづかに註の中で觸れるにとどまつたところの、ブイコフスキー的史料批判學の最後の形式たる「記念物の最終批判的綜合的批判」なるものの分析を行ふことが、最も手近な道であるが、紙數の關係上もはや不可能であらう。だからここにはその分析からの結論だけを書いてをくにとどめる。

この「最終的綜合的批判」なるものは、ベルンハイム的史料批判學から出發せるブイコフスキーの體系に於ける、ベルンハイム的史料批判學の自己否定として、破綻およびその救出として、あらはれる。對象の處理の仕方から遊離せしめられたやうな史料の處理の仕方を以てしては、遂にいかなる「最終的」處理も不可能に終はる——そこで最後に、「史

的唯物論の理論がその根底たるところの同一の方法の變種」であるやうな五個の「歴史批判」的方法を以て、一切の史料にいはば現實の魂を與へるざをえない。ブイコフスキーの體系はかくのごとくして終はつてゐる。

この五個の最後的方法それじたいは、前に彼の「技術學」に於けるリフレインじたいについて見た場合と同様に、相互の關係規定が夫々不明確な形で與へられてゐるにすぎないが、そのうち例へば彼が「歴史的類推法」と呼ぶところのものは、同一發展段階上の諸國民の歴史には本質的類似が見出されるといふ觀點から諸史料の批判的處理を行ふもので、右に述べた發展段階の理論としての經濟史の適用にほかならない。そのほか「方法論的考察の方法」にしても、「對照法」及びその「特殊の變種」だといふ「殘存物法」にしても、「補助的歴史部門の資料の吸收法」――「經濟學の研究對象となる資料」のことが他のものと共にこの中に數へられてゐる！――にしても、すべてその合理的な内容と意義とに於いてならば、如上の史學分類のコースのどこかで與へられ終つてゐた筈である。



そしてこの「最終的綜合的批判」と、かのリフレイン部分とを抜き去つたあとに殘るブイコフスキー「方法學」とは凡そいかなるものであるだらうか？　おそらくそれは一方でカードあるひはノートの作製法の手順の説明と、他方で言語學、考古學、人類學等の「歴史補助學」に關する概説と――のみであるだらう。この後者ならば、それじたい史的唯物論の方法に基く再建と新たなる發展とが、すでに著るしい形で與へられつつあることは人の知るところである。それらはベルンハイム的史學に於ける「補助學」的位置を遠く乘り超えて、既にそれじたい歴史認識の序列に於ける獨自の領域と限界とを所有するところの、歴史的社會諸科學たるものである。かくいへばとていはゆる「歴史研究の方法學」を諸社會科學部門のなかに解消せしめるといふのでは決してない。それどころか、「歴史的諸材料の整理を容易にし、それの個々の層の序列を示唆するに役立つ」ところの諸命題――換言すれば史料處理學としての具體的形態にまで、諸社會科學部門の相互に聯絡するところの方法的諸歸結をまとめあげるといふ仕事は、益々切要な問題として歴史家の前に横はつ

てくる。だがそれはつねに具體的な「主題」と共にある。たとへば「一般史」の方法學として、あるひは「維新史の方法論」として、あるひは「アジア的生産様式」の問題を決定するための方法論として、あるひはウイツトフオーゲルが「市民社會史」として形成してゐるやうな近代史のための一般的方法學として、等々。



# 第二篇　近代歴史哲學の史的批判

## まへがき

歴史哲學とは何ぞや。かかる廣汎なる問題に、ここではもとより全面的に立ち入る餘裕は持たぬ。それは他のところで、他の個所の分擔者が、恐らくそれも間接的にではあるかも知れないけれども、より詳細に關説してくれるであらう。しかしその要約はここでも必要である。それは、以下に展開される史的敍述の序言として、歴史哲學なるものの一般概念をあらかじめ讀者に――とくに初歩的な讀者に提供しておく必要を認めずに居られないから。

歴史哲學は、誤解を避けるために正確に言ふと、近代的な意味における歴史哲學は、ブ

ルジョア的學問の世界における、社會觀である。とくに、歴史的に見た社會觀である。この故に、近代市民社會生誕の黎明期にあつては、多くの社會學者は、同時に歴史哲學者であつた。後代「歴史の世紀」と呼ばれる十九世紀ドイツにおけるやうな、社會學と歴史哲學との、不幸なる分裂はありえなかつた。社會學と歴史哲學との分裂は、ドイツ古典哲學開展の内部に準備される。歴史哲學はこのところに社會學と分離して、むしろ今度は哲學と手を握る。ここにおいて歴史的な社會觀は、文字通りの意味の「歴史哲學」となる。「歴史哲學」なる名稱は、十八世紀におけるヴォルテール Voltaire (1694—1778) の與へたところなりとは言へ、この文字通りの意味の「歴史哲學」は、即ちわれわれが今日その名のもとに直ちに想起するがごとき内容の歴史に關する學は、ドイツ古典哲學的思潮の胎内に化成したものである。ここでは歴史哲學は、人間の歴史に對する認識論となつてゐる。自然的存在と歴史的存在の差別に關する哲學的考察が、その前面に押し出されてくる。自然的世界と歴史的世界との各特殊性——その認識にめざめたることは、明らかにかの自然的



世界と歴史的世界の質的差別を抹殺して、歴史的世界をかの自然科學的——詳しく言へば機械論的に把握せんとしたフランス唯物論的歴史哲學者の思想より一歩進展してゐるとはいへ、彼等は歴史的世界と自然的世界を二元的にばらばらにきり離すことよにつて、かの新カント主義者に見らるる如く、自然的世界においては科學的認識の可能を留保するが、歴史的世界に對しては科學的認識の不成立を論結し、もつて社會發展の合法則性の存在を否認し去り、自然科學の「法則的學」または「規範的學」に對して「個別記述的學」なる化け物を提立する。かつてカント、ヘーゲルにおいて反動的側面と共に著しく進歩的要素を有せるドイツ哲學は、いまや反動の認識論的狹霧のさ中に、いとも深遠なるごとき假面に自己を包みつつ崩落してゆく。歴史哲學は、フランス唯物論的思想家に見られたごとき、觀念的にではあれ、形而上學的にではあれ、機械論的にではあれ、ともかくも人類歴史の發展を、それ自身の内在的動因において、且つ又多かれ少なかれ合法則性追及の姿態において、自己を開展せしめんとする意慾を放棄して、ここに至つて「直觀的」、「價値的」一

切のたわ言のもとに、現實の歴史發展に思辯的煙幕を張りちらす烏賊となる。講壇史學がいとも鄭重な禮と年金とをもつて迎へにくる。歴史の眞に科學的・現實的な認識は、あらゆる社會的惡條件のもとに、ただ史的唯物論にのみ委任される。しかしながらこの現實社會の樣相そのものが、現にわれわれが卽今の社會に目に觸れ耳にききつつある事象そのものが、それ自身が直ちに史的唯物論のたぐひなき正當さをいやが上にも確證づけてゐるのである。

歴史哲學の社會學よりの分離は、言ひうべくんば、フランス唯物論者に見られたごとき現實の社會發展の具體的認識よりの袂別は、一つには行きつまれる機械論的、自然主義的歴史觀に對する反動であり。より根本的には、歴史發展における科學的認識の拒否である。もとよりこの事象の根柢には、十九世紀後半帝國主義時代に突入せるブルジョアジーの一般的反動化があり、漸次組織化してゆく人民諸層の解放運動の脅威が横たはつてゐる。



歴史哲學と社會學との提携・融合は、現在においてはただ史的唯物論のなかにのみ、より高揚された形態において實現されてゐる。十八世紀における進步的階級ブルジョアジーの遺産を、十九＝二十世紀の唯一の進步的階級プロレタリアートが繼承し發展せしめてゐる。歴史現象の科學的認識――その合法則性の追究は、ただ史的唯物論のなかにのみ生き、そのなかでのみはじめて完き可能性を賦與された。史學ははじめてその徹底した意味において科學となつた、ドイツ流の「歴史哲學」は揚棄された。そして歴史學と哲學と社會學と經濟學との融合・集成・總決算として、卽ち「もつとも包括的な世界觀としての史的唯物論」が登場してきた。しかしながら所謂「歴史哲學」の存在は、ブルジョアジーの支配の存續するかぎりは繼續するだらう。たとへば「社會學」の存在するやうに。所謂「歴史哲學」は、ブルジョア・イデオローグの歴史的な社會觀なのであるから。

# 第一章　フランス唯物論的歴史哲學を中心として

近代的意味における歴史哲學は、まづ大體の思潮において、十八世紀後半を中心とするフランス唯物論的歴史哲學と、十九世紀前半を中心とするドイツ古典哲學的歴史哲學と、史的唯物論成立後における崩解期歴史哲學との三部類に大別することができると思ふ。

これらは大體において、各々時間的においてこもごも繼起してゐるものであるが、それ故ここでは當然敍述の順序として近代歴史哲學の黎明期、十八世紀後半を中心とするフランス唯物論的歴史哲學から、第一にその史的解明の筆がすすめられる。

そもそもフランス唯物論なるものは、十八世紀フランスにおけるラメトリー Julien de



La Mettrie (1709—51)、ドルバック、Paul Henri Thyry d'Holbach (1723—89)、ディドロー Deiris Diderot (1713—84) 等の哲學に、もつとも尖鋭にもつとも非妥協的な形態においてその精悍な姿をあらはしてゐるとはいへ、その源泉はさらに遠く、十六＝七世紀イギリス經驗論哲學に、また十七世紀スピノザ Baruch de Spinoza (1632—1677) に結實せる所謂大陸唯物論にまで遡行しえられる。

古代的唯物論に區別して言はるるところのこの近代的唯物論は、知らるるごとく、中世封建的神學的世界觀に對する近代ブルジョアジーのイデオロギーであり、かかるものとして發生し發展した。その基底に照應するところのものは、もとより近代的資本制生產方法の發展であり、その發展のために舊來の經濟的、政治的、法律的、思想的、その他一切の古き桎梏が揚棄せられざるを得ず、この故にブルジョア・イデオロギーとしての唯物論は、おのづから中世封建的神學的世界觀に對する揚棄的對立物として生誕せしめられた。この事實のうちに、近代唯物論の、封建的神學的世界觀に對する、革新性も、鬪爭性も、打破

性も、またおのづからにして理解しえられる。

そこでまづこの被揚棄的對立物としての、舊來の封建的神學的世界觀とは如何なるものであつたか。とくにその歴史觀とは如何なるものであつたか。

中世神學的歴史觀の、もつとも典型的なものは、これを聖アウグスチン St. Augustin (354—480) の "De civitate Dei" なる著書のうちに見出すことができる。

アウグスチンにあつては、人類の歴史は、神の意志の發現として理解せられる。そしてその目的は、地上に完き神の國を實現することにある。アウグスチンの歴史譚によれば、最初天上に唯一の神の國があつた。その神の國において、一部の不心得な天使どもが、創造者なる神に離反したとき、その時最初のいとも不幸なる分裂が發生した。この分裂は、神がこの地上の世界を創造したときにも、厄介にも移し植えられ、惡魔に魅られた天使どもはそこに「地上の國」を建設し、神はこれに對抗する意味において神に選ばれしものたちによつて「神の國」を打ち建てしめた。かくて地上の人類生活がはじまつて以來、この



「神の國」と「地上の國」とは不斷の爭鬪を繼續し、アウグスチン時代の現狀にいたつてゐるものであるが、しかしこの鬪爭は、窮極においては、遂に「神の國」の全面的勝利に終り、完き「神の國」が地上に出現せられるものと、いともめでたく豫定されてゐる。註言するまでもなく、この「神の國」とはキリスト教會を中心とするキリスト教徒によつて構成せられ、「地上の國」は非キリストの徒黨によつて構成せられてゐる。

まことに奇妙なる歴史構成である。ここでは、歴史現象を發生せしめる基本的對立物として、キリスト教徒と非キリスト教徒との二つの要素が擧示されてゐる。この種の歴史觀は、もとより批判の對象とすべくあまりに愚かしい。しかしながら、人間の生活の目的を、神の命を奉ずることにありとなし、そしてその神の命とは一體どんなものかといふと、つまるところ一言で言ふと、現實に與へられた社會關係で滿足し決して不平や反抗心を起さないことといふ、まこと治者層にとつて至極都合よろしき人生觀がこの歴史觀の基礎に横はり、そしてそれをもつて、幾世紀にもわたる酷烈にしてまた陰暗なる中世封建社會の支

配が不安少きものにせられたことを思へば、この、もはや現代の童兒さへも欺けぬ愚かしき歴史譚意味も、あながちに無視できない。

このアウグスチンの歴史觀は、彼の時代における社會一般の歴史觀を、もつとも代表的に明確に表現してゐるばかりでなく、その後中世全體にわたる、封建的神學的歴史觀の先驅的基礎となつた。それは更にオットー・フォン・フライジンク Otto von Freising (十1158)、トマス・フオン・アクィノ Thomas von Aquino (1227—74) 等によつて發展せしめられる。それはもとより、社會の各發展段階に應じその時々の社會思想に適應せしむべく、變容・扮飾・適合せしめられてきてはゐるけれども、その根本的世界觀照の基礎においては、卽ち人類歴史の發展を、ある種の超絶的なものの意志にもとづくものとする、かの宗教的觀點においては、アウグスチンといささかの隔りもない。

これらの神學的歴史觀の基礎にあるものは、言ふまでもなく、神といふ大靈魂が根本で物質世界はその產物だ、從つて精神と物質との關係においては、精神が主で物質は從たるものだといふ、かの宗教的觀念論である。宗教的觀念論は社會における肉體勞働と知的勞働との分業とともに現はれ、社會の生產力が發展して、他の人間の勞働に寄生する一群の階級があらはれるに伴つて、ますます發達した。肉體勞働から遊離せる寄生者らには、とくにその中の僧侶や學者のやうな知的勞働の專業家らには、知的勞働こそこよなく尊いもので、肉體勞働は奴隷に委す値うちしかない限りなく賤しいものに思はれ出した。精神が絕對化され、物質は第二次的な價値なきものに下落した。かくして宗教的觀念論が漸次その形態をととのへていつたのであつた。

近代的唯物論はかかる宗教的觀念論の對蹠物、その揚棄的對立物として登場する。さきにも述べたごとく、ラメトリー、ドルバツク、ディドロー等に代表せられるフランス唯物論哲學にあつては、物質的世界はわれわれ意識から獨立に嚴に存在するものであつて、そのものの存在のために何ら神といふがごとき超絕的なものを假想する必要はなく、宇宙は

それ自身において存在し、その存在のためにそれ以外の何ものも必要としないと確信した。また、精神と物質との關係については、物質が根本的なものであつて、精神はそれから發生したものだと考へた。たとへばディドローのごときは、卵の中で漸次胚が成長して遂に意識を有する雛が現はれる過程を觀察して、無感覺な物質から、感覺、生命、意識、思惟等のあらはれることを論じてゐる。この哲學にあつてはまた、かのスピノザに既に現はれてゐる物質世界の「自己原因」といふ思想から更につき進んで、この世界全體の「自己運動」といふ思想にまで到達してゐた。フランス唯物論にあつては、物質の運動なるものは、本來物質そのものに具有された性質であつて、ニュートン Newton (1642—1727) 物理學におけるがごとく、物質の運動はそのはじめ外部から神といふがごときものによつて賦與されたものでなく、運動は物質の本來の一性質であつて、古來運動なき物質はありえず、物質なき運動もありえず、物質世界は永遠の昔からその自己運動にもとづいて展開されきたつたものだと考へられた。かくて當時の唯物論者たちは、その時までまだ完全に神



學から解放しつくされてゐなかつた自然科學を、その羈絆から救ひ出して、あくまでも、「世界をそれ自身から證明せん」(エンゲルス)と敢然と主張したのであつた。

ここに、進歩的初期ブルジョア・イデオローグたちの、封建的神學的世界觀に對する、全面的抗爭性を觀取しうる。けだし、ブルジョアジーは、彼等の生活條件たる工業の發展のために自然科學の發展を必要とし、自然科學の發展は、漸次人間の現實世界に對する認識を、より正確に、より深きものたらしめていつて、このことは他面、いまや擡頭しつつあるブルジョアジーにとつて、古き封建的生產關係、社會組織、イデオロギーが打破すべき必要ある桎梏として寫りはじめしことと相俟つて、必然的に從來の封建的神學的世界觀の虛妄に對して鋭い闘爭的批判を眼を開かしめていつたから。

十八世紀後半を中心とするフランスにおける歷史哲學者らは、その思想の根底において、多かれ少なかれかかる唯物論的見解の地盤の上に立つ。しかしながら、フランス唯物論もまた時代の子である。それはその時代性その階級性に制約せられて、必然的に諸種の缺陷

と弱點とを包有する。それはまづ、著しく機械論的であつた。けだし當時においてもつとも發達せる科學は力學であり、彼等——フランス唯物論者たちはその學問の發展段階に制約せられて、すべての運動形態を單なる力學的運動に還元することによつて機械論に陷つた。デカルトは動物を機械と考へ、ラメトリーは「人間機械論」を書いたやうに、彼らは生物や社會のやうなものにまで力學的見解をおしひろめて、それにもとづいてその運動を解明せんとした。また彼らは物質の「自己運動」といふ思想に迄到達してゐたとさきに言つたが、その運動もかかる力學的見地からとらへられてゐたので、眞の自己運動、即ち辯證法的な自己運動の思想にまでは到達しえなかつた。彼らにあつては、運動はすべてどんなものでも一樣な力學的運動として考察され、それぞれの運動形態における質的特性は完全に無視されて、その結果として當然、低い運動形態と高い運動形態との間に存在する發展の關係を正しく把握することができなかつた。なるほど彼らは『世界全體の自己運動を認め、それによつて神を追放した。しかし、世界の個々の物、個々の運動形態については



自己運動を認めなかつた。フランスの機械論者によれば、個々の物は他の物との力學的交互作用によつて運動の狀態に入る。つまり一つの物が他の物に衝突することによつて運動が起り、一切の物のかういふ運動の總體が全體としての世界の自己運動を成す、と假定された。この見解は甚だ不徹底である。何故なら、最初、或る物が他の物に衝突するといふことはどうして起つたか？　ニュートンはそれは神によつて起つたと說明した。フランスの哲學者たちは交互作用といふ觀念に到達した點ではニュートンよりずつと優れてゐるが、交互作用は各々の物の自己運動を前提とするといふことまでは理解しなかつた。「もし注意深く觀察するならば、吾々は、嚴密にいへば自然の種々の物體には自發的運動（自己運動——筆者）は全くないといふことを了解するだらう。何故ならそれらすべての物體は間斷なく互ひに作用し合ひ、それらすべて物體の運動は外部から働きかける目に見える。又は目に見えない原因に依存するからだ。」　かうドルバツクは言つてゐる。つまり各個の物はそれ自體では、單獨では運動能力を有しない。自然全體は運動なしに存在しない。しか

し自然の個々の微少部分はそれ自體では靜止の性質を持つてゐる。運動はこれらの、單獨では靜止的な部分の力學的交互作用によつて起る。從つて運動は各個の物質部分に內在するもの、內的なものではない。それらの物質部分に內在するものは靜止であり、不變性である。

かういふ立場では、物の運動や發展は輕視され、物における不變的なもの、固定した方面に重きが置かれるのは自然の勢である。」（永田廣志　唯物辯證法講話」四五—六頁）かくしてフランス唯物論者らは、また、現象を運動、變化、發展の方面から見ないで、不變固定、孤立、靜止の方面から見る形而上學に陷つてゐた。機械論と形而上學とは、物とその影のやうなもので、兩者は密接に結び合つてゐる。

フランス唯物論は、かかるもろもろと缺陷を有してはゐるが、しかしながらそれは、イギリス、オランダにおける從來の唯物論的傳統の總括であり、決算であり、それはまた所謂「素面の哲學」として、從來の唯物論からその神學的・觀念論的ベエールをとり拂つて、



もつとも赤裸々な、もつとも鬪爭的なブルジョアジーの哲學として出現したものであつて、それは哲學的見地からはかの十九世紀後半ドイツに現はれた唯物論——所謂俗流唯物論よりも遙かに高い水準に立つてゐるものであつた。

かかる唯物論的思想の基礎の上に立つ當時の歷史哲學も、また必然的に、その唯物論が具有してゐるがごとき長所と缺陷をさながらにして反映する。しかしながらとくに、フランス唯物論者は「下の方」では、卽ち自然觀の方面では唯物論者であつたが、「上の方」では、卽ち社會觀、歷史觀の方面では觀念論者であつたといはれるごとく、社會觀、歷史觀の分野においては、著しく觀念論的傾向を露呈してゐることは否定しえない。それは以下の、それぞれの思想家の歷史觀の、具體的究明にあたつて見られるであらう。

フランス唯物論的歷史哲學の代表者として、われわれはまづ、ボーダン Jean Badin (1

530—1596)、モンテスキュー Charles de Secondat, Baron de Montesquieu (1689—175
5)、ヴォルテール Voltaire (1694—1778)、ルッソオ Jean-Jacques Rousseau (1712—78)、
チュルゴー Anne-Robert Jacques Turgot (1727—81)、コンドルセー Condorcé、サン・
シモン St. Simon (1760—1825) 等の名を擧げることができる。

まづルッソオにあつては、人類の歴史は精神の發達である。そして精神の發達に刺戟を與へるものは、人間の不斷の要求である。彼はその著「人間不平論」においてのべてゐる。「經驗はかく敎へる。地上のあらゆる國民に於て、理性は常にその要求の程度に應じて發達する」と。

コンドルセーも、人間の發展を、ルッソオとひとしく、人間精神の進歩と觀じた。そしてその進歩の動因も、ルッソオと等しく「種屬的存在としての」人間の要求である。サン・シモンにおいても、このことは同じである。彼は大體においてコンドルセーの歴史觀を踏襲し、歴史によつて「人間精神の進行を理解しそれによつて文明の完成に努力するのが余



の自らに課した目的である」といつてゐる。

このことは、十八世紀を中心とする、フランス歴史哲學者のすべてのものに、多かれ少なかれ共通する。彼らは現代の觀念論者と同じく、精神が歴史發展を規制する根本動因なりと見る。彼らは、自然觀の方面においては意識から獨立した客觀的世界の存在を確認し物質的存在こそ唯一の眞なる存在だと主張してゐながら、社會觀・歴史觀の方面においては、精神が根本となつてゐる。卽ち前に言つたやうに、「下の方」では卽ち自然觀の方面では唯物論者であつたが「上の方」では卽ち社會觀・歴史觀の方面においては觀念論者であつた。しかしながら、外在的な神が自然と歴史との動因であると見る、かの神學的世界觀に比すれば、これは一つの顯著なる進歩だと認めなくてはならぬ。彼らはともかくも、歴史を、その內在的要因によつて解明せんと努力してゐるのである。

だが、ここで今や問題になつてくれることは、しからばその精神は如何にして發展するか。ルッソオは、すでに引用したごとく、それを「人間の不斷の要求」に歸する。そして

この要求の言葉のもとに、主として經濟生活における欲求を理解する。而して經濟生活において、この欲求は如何にして變化するか。彼はそれを、更に自然的環境なる氣候と土地の性狀とに見出す。

われわれはここに、かの周知なる地理的唯物論の相貌を想起する。そもそも地理的唯物論なるものは、觀念論的社會・歷史觀に、接ぎ木されたる唯物論であり、それは第一には、社會發展の根本要因なる精神の發展を理解する、當時の思想家たちが辛らくも見つけ出した鍵であり、また各々異れる地域における民族性・文化・社會制度・法律制度・政治制度等の差異を理解する鍵である。それは人間社會生活を、縱と横とより理解する鍵であり、つづめて言へば、一切の人間社會の事物を理解するところの、いとも重寶なる秘密の鍵である。かくて地理的唯物論は、當時の、進步的・反動的いづれを問はず、ともかくもその時代の著名なる社會學者・歷史哲學者らの思想の根柢にあまねく浸潤してゐる。

ジヤン・ボーダン Jean Bodin (1530—96) は十六世紀後半のフランスにおける社會學



者ならびに歷史理論家である。地理的唯物論的見解は、すでに彼のうちに明確に觀取し得られる。

彼によれば、人間の行爲は、彼の「氣質」によつて定められる。そしてその「氣質」は彼の住居するところの氣候と、その土地の性狀とによつて決せられる。例へば、土地が十分なる食糧を提供するところにあつては、人間はさして食糧獲得に勞力を費す必要がないが故に、彼の肉體ならびに精神は退步する。從つてその民族は退嬰的であり、遊惰であり、不活潑である。ところがこれに反し、土地が十分な勞力を投じなくては適當な食糧の得られないところにあつては、人間は不斷にその肉體と精神とを勞働に用ひなくてはならぬから、肉體や精神が發達する。そこから一定の技術が發展し、遂には一定の科學の發展に導かれる。("De la Republique")

モンテスキューにあつても、またこの見解を踏襲してゐる。しかし彼にあつては、自然的環境の影響の理解において、たしかに一步ボーダンより後退してゐる。彼は自然的環境

の影響として、ただ單に氣候の人體・精神に及ぼす生理的な影響をみとめてゐるにすぎない。

たとへば、寒い氣候のもとにあつては、人體の心臟の作用と纖維の反作用とが活潑に行はれ、血液はよく心臟に流れるが故に、心臟が極めて力强い。この故に寒い國の人民は青年のやうに元氣であり、熱い氣候のもとではその反對である。そしてここから、あのスペイン王位繼承戰爭において、北方の人民が南方に移されてなぜその國の土着人程に戰鬪力が無かつたかを說明する（「法の精神」）。あるひはまた、地理的環境をそれよりより廣義に理解した場合でも、せいぜい肥沃な土地における貴族的政治形態を、そこでは人民が土地耕作に勞するに忙しくして、自分の自由や利益を守らうとする餘裕や機會が與へられないからといふ風に理解してゐるにすぎない。ボーダンにおけるがごとく、地理的環境の人間の勞働行爲にまで及ぼす影響については、モンテスキューは遂にしまひまで無緣な人であつた。



この思潮はまた、ヴォルテールのうちにも生きてゐる。彼は"Essay sur les moeurs et l'esprit des nations"なる論作において、「それ自身として放任せられてある人間悟性」が、それ自身としての道程を辿るとしても、土地の異るに從つて自然的環境の諸條件の影響によつて、その様相は同一ではない。即ち、異つた土地では、異つた「國民性」が發現する。ルッソオも、さきに說くがごとく、歷史觀の方面においてこれの思想家たちの、子孫であり、兄弟であり、同類項である。

しかしながら、今や、人間の欲求の發達は、ただ單に自然的環境の影響のみよりは說明しえられないことが漸次明らかとなつてくる。すでに讀者も氣づいてゐられるであらうごとく、地理的唯物論は、各國民の文化の差異を說明するには、一應便利であるかも知れないが、それは、同一地方における人間精神の發展を說明するには頗る不十分である。如何にして人間の精神は發展するか？　もしも社會の發展が人間精神の發展にもとづくものとするなら、人間精神の發展の動因を說明しえないならば、歷史において何ものも理解しえ

てゐないことを證明するにすぎない。社會の發展は人間精神の發展にもとづくといふことは、ただ單に言葉をいひかへたことにすぎなくなる。

この必要は、當時の思想家をして、漸次人間生活の經濟的分野に、その注意を集中する方向へ誘なつていつた。

すでに十六世紀、ボーダンにあつては、地理的環境が勞働方法へ影響を及ぼすことによつて、それを通じて——つまり勞働方法を通じて人間の精神に影響を及ぼすといふ見解にまで到達してゐたことをわれわれはさきに見た。經濟生活が人間の精神に影響を與へることは、すでにここにおいて人間の認識に登場してきてゐる。

經濟生活の重視は、漸次さまざまの學者の注意を喚起し出してきた。ルッソオにあつては、この思想はあまり明確な形をとつてあらはれてきてはゐないけれども、アベ・アントニウス・イヴェ・ゴーゲェ Abbé Ant. Yves Goguet にあつては、十八世紀中葉において、すでにある國民の道德と、その國民が到達した科學及び技術水準との間には、否定し



えない因果關係の存在するといふ認識に到達し、そこからして、科學從つては生產關係の進步に伴つて、必然的に道德觀念に變化を生ずるといふ歸結を導き出してゐる。彼は言ふ「耕作の發見は全く別な道德を導いた。この技術が用ひらるるに至つた國民は、ある一定の土地に繼續的に定住しなくてはならなくなつた。彼らは結合して都市を作つた。がこの種の社會には耕作を知らない或はそれを等閑にしてゐる國民よりも、より多くの技術が必要であつたから、從つて遙かに多くの法律を必要とした」(("De l'origine des lois, des arts et des scincees et de leur progrès chez les anciens peuples", 1758) と。

彼にあつても、一切の科學や技術を發展せしめる動力は「必要」である。卽ちルッソオの言ふ「要求」を滿足せしめるところの「必要」である。それ故ここから「必要が一切の科學及び技術の母である」といふ、かの「必要は發明の母」なる世上流布の諺の原型が打ち出されてくる。

アベ・トマス・レーナール Abbé Thomas Raynal は、更に步みをすすめる。彼もま

た道德變化の基礎として科學的技術を認めるのであるが、彼は更に、宗教、政治、法律等の變化をも、經濟的狀態の變化から導き出す。たとへば彼は、キリスト教が農奴解放を實施せしめたといふ從來の見解を反駁して、「吾人は敢て他の見解を持してゐると言明する。工業及び富が人民の間に重要になつた時に、君主がこれらのものを注目しはじめた。人民の富が君主と貴族との爭鬪の場合に君主に役立つたので、人民の狀態を改善せんとする法律が生じた。キリスト教の精神でなく、むしろ商業がその結果して生ぜしめた健全な政策が、卽ち王を動かしてその武士の奴隷(農奴)を自由だと宣言せしめるに至つたのである。」卽ち、農奴解放は、經濟生活の變化の結果招來されたものだと見るのである。

地理的唯物論、そしてこの經濟主義――人間生活における經濟的要素の重視は、やがてもつと廣汎な社會環境といふものを、人間精神に影響を及ぼすところのより包括的な契機として理解せしめる。ここに社會主義――フランス社會主義、またの名は空想的社會主義が生誕する。卽ち人間は環境の產物だ、不自然な社會環境には、不自然な人間が生產され



る。人間をよくするには、社會環境――卽ち社會組織を變更しなくてはならぬ。かくてサン・シモン、フーリエ、オーエンは、市民社會の幻想にもとづくところの、各自の理想的社會を、その頭腦に化成せしめたのであつた。

しかしながら、知らるるごとく、これらの空想的社會主義は、人類社會發展の、合法則性の認識に缺如してゐる。彼らは、現實に與へられたるところの社會發展の法則の分析から出發せずして、資本制社會の害惡を捨象せるところのそれぞれの理想社會を幻想することによつて、その社會の招來を結局において空想的に希求した。眞に現實的な社會主義は、史的唯物論の出現をまつてはじめてその可能性を與へられたのであるが、だがこのことはむしろここでは、一種の冗言に屬するだらう。

社會環境――この漠然たる內容を暗示する言葉のうちには、勿論われわれは、政治、法律、經濟生活、文化、イデオロギー等の諸種の契機の存在を理解しうる。而してこれらの社會の諸契機のうち、何がもつとも基本的で、もつとも根源的であるかといへば、當時の

歴史哲學者にあつても、それは經濟であつた。それはさきに、レーナルの思想のうちに、われわれがすでに明らかに見たごとくである。この經濟生活の變化にともなつて、一切の他の上層建築――彼等はかかる言葉を明確に使用してはゐないけれども――卽ち政治、法律、文化、イデオロギー等の一切の社會的要素が影響を蒙る。われわれはここに、周知の史的唯物論の根本命題の一つに近似せる思想を見出す。しかしながら當時の歴史哲學者らにあつては、經濟生活の發達を社會關係の內部から導き出すといふかの史的唯物論のやうな見地にまではまだ到達してをらず、しからば經濟生活は如何にして發達するかといふ問題になると、かれらはその原因を、さきに見るごとく社會外部の地理的環境に歸するよりほかに、解決の道を知らなかつたのである。それ故この種の經濟的社會觀＝歴史觀の基礎には、依然として地理的唯物論が横はつてゐる。現代においてみるがごとき社會＝歴史觀におけるかの經濟重視主義も、畢竟この地理的唯物論の、不健全な成長をとげた後裔にすぎない。彼らは根本において、十八世紀のフランス唯物論者の思想的水準に踏みとどまつ



てをり、そして惡いことには、それよりも不徹底で、それよりも曖昧である。

かくの如く當時の歴史哲學は、精神に影響を及ぼすものとして、經濟的な要素を考察に登したが、しかしそれは、經濟的要素が根本的で、精神が從たるものだと見たのではない。彼らはこの點では頗る觀念論的であつて、社會＝歴史においてもつとも根本的なものは依然として精神であつて、經濟的要素がこれに影響を及ぼすといふも、それは單にその外貌を變ずる位にすぎないと見られてゐた。卽ち、ここにあつては、精神は「人間精神一般」といふがごとき本質においては不變的、固定的なものとして把へられ、人間精神は社會關係總體の生產物だといふことが理解されてゐない。たとへばすでに述べたごとく、モンテスキューは、社會の進步にあつては精神がその創造者としての機能を果すけれども、その作用は異つた地帶では自ら異つてゐると觀じ、ヴォルテールにあつても「それ自身として放任せられてある人間悟性」がそれ自身としての道程を辿るとしても、土地の異るに從つて自然的環境の諸條件の影響をうけて、その樣相は同一ではないと言つてゐるのを見

ても、這個の事實は肯けやう。更にこの精神の絶對化は、大革命後においては一層明瞭に立ち現はれ、例へばコンドルセーにあつては、政治的や社會的の變化を經濟的發展の影響に歸せしめたあの見解さへも消え失せて、總ての進歩發展は單なる哲學——哲學自身は合理的思想の所産だと考へられた——の所作だと考へられ、さらにサン・シモンにあつては經濟樣式がその時代の觀念形態を規定するのではなく、反對に精神が——詳しくいふとある時代の精神の方向がその時代の經濟生活を規定するのであるといふ思想がいよいよ明確に現はれてゐる。彼にあつては、精神はその發展の過程においてある一定の經濟制度を發生せしめ、この經濟制度がさらに政治、法律等のその他の社會制度に影響をもたらすのであると見られてゐる。たとへば私有の發生のごときも、精神がその進歩の過程において一定の技術上の發達をもたらし、その發達が私有のごとき新しき社會關係を生み出したのであると解釋されてゐる。かくて彼にあつては、經濟樣式の如きは彼の言葉を借れば單に「第二次的」のものにすぎず、「精神の進歩によつて惹起された作用の系列間の中間肢體に



ほかならない」のであつた。

かくのごとき社會要素における精神の絶對化は、言ふまでもなく明らかな觀念論である。フランス唯物論は、一應「神」をこの現實世界から追放したが、それは社會＝歴史觀の分野において、「絶對精神」、「悟性」、「理性」等の名のもとに、いつの間にかこつそりと忍び込んでゐる。宗教的な「神」は、本來人間靈魂の絶對化に發するが故に、近代における精神の絶體化も、所詮宗教的世界觀から完全に臍の緒を斷ちきつてゐないことを意味するにすぎない。この精神の絶對化は、ルッソオにおいては理神論となつてあらはれてゐる。ブルジョアジーの宗教よりの離脱には一定の限界がある。彼らは封建制度と闘爭する必要のあるかぎりそれと結合せる舊來の宗教の批判に從事するが、自己が生み出さんとする社會もまた大衆の上に寄生せざるを得ない社會であるが故に、大衆統御のために宗教を利用せざるを得ず、この故に結局は眞の無神論に徹底することは不可能で、大革命前後のフランスに見られたごとく、一方においてジャン・メリエ Jean Meslier、ラトメリー、ドル

バック的無神論の傳統を有しながら、遂には結局ロビスピエール Maximilien de Robespiere (1758—94) のルッソオ的理神論の勝利に終つたのであつた。しかも無神論者と稱せられるラメトリーさへも、人民は理性にまで成長してゐない、それ故に彼らは宗教を必要とするであらう、と傍らで呟いてゐる。（參照、羽仁五郎「社會史的思想史」—近世—）

フランス唯物論者が機械論にとらはれてゐることは既に述べた。そしてこれは、世界を力學的に考察することによつて、運動における質的差異を抹殺し、物を靜止、固定、不變に見るところの、形而上學に陷つたことも述べた。

彼は自然觀においてのみでなく、社會＝歴史觀においても、またかかる形而上學に陷つてゐた。それは一つには、前に述べた人間精神を本質においては固定、不變なものと見る、あの見方に現はれてゐる。も一つは、法律觀における自然法説に現はれてゐる。フランス



唯物論者の多くの者には、十六＝七世紀のイギリス經驗論哲學者と等しく、人間の社會には、また別の言ひ方をすれば人間の心には——當時の思想家たちには社會性は各個人の性質の單なる總合體だと見られた——本來自然から（イギリス經驗論哲學者にあつては神から）與へられた、一定不變の法律、卽ち自然法がある。それが人間の生活を律するもつとも根本的な法則であつて、人間はそれに從つて生活をなし、又社會を律してゆかねばならぬと考へられてゐた。

かかる形而上學的見方にあつては、社會の發展といふものは、本質的には問題にならぬ。なぜなら、人間の性質はその環境、その時代によつて多少その外貌を變ずるかも知れないが、その本質においては不變な固定的なものと見られてゐるのであるから、個人の性質の總合體と見られてゐた社會の性質も、また本質的には、一定不變のものとして把へられてゐるからである。

ここに「非歴史的な十八世紀」の存在理由がある。彼らにとつては、中世とはただ「一

千年にわたつた一般的野蠻狀態によつて歷史の中斷せられた」時代としか思はれなかつた。ルッソオはあからさまに「歷史の眞實は問題ではない」とさへ斷言して、「歷史に對する嫌惡」を表明してゐる。封建的秩序のもとに資本の發展によつてひき起された下層民衆の一般的貧乏、その悲慘さ、上流階層の虛飾と頽廢、其らの現實に對する不快・反抗の念。現實と歷史——つまるところ一般文明なるものに對する嫌惡の情を呼び起こして「自然に歸れ」なる言葉のもとに、當時の思想家をして「自然的」なるものを憧憬せしめそこへ逃避せしめたのであつた。

しかしながらかかる一般的潮流のなかに、その一部に自然法學說に對する反對、それに伴つて社會發展の思想が、微弱ながら流れてゐないではない。たとへばすでに早くモンテーニュ Michel de Montaigne は十六世紀初頭に出版せられた著書のうちで、

「彼らがある種の法律に確定性を與へんがために、その背後に彼らの名づけて自然法と稱するところの、永久的な不變な法律——人間にその內部的本質に依つて與へられた法律



——があると主張するのは、極めて滑稽である。ある者はかかる法律は三つあるといひ、他の者は四つあると云ふ。後者は多くて前者は少ない。その法律が他の法律と同樣に認識し難い證據である。それにそれ等の法律も極めて不幸であり（何となればこの法律の中で、全人類の一般的の認知や同意を得る幸福、或は運命を與へられた唯一つのものもないと云ふのであれば、不幸とよりは言ひ樣がないから）極めて悲慘であり、その三つ或は四つの選ばれた法律の中で、一國民許りでなく數多の國民によつて反對せられないもの、非難せられないもの唯一つもない」（"Essaise"）といつて、總ての法律は「人間的に發達した法律」であることを主張してゐる。

またかのスピノーザにあつても、永久不變の自然法またはその他の法律原則のごときは到底認知しがたいものであつた。

これとともに一方において、かの孤立した個人が各々契約によつて結合して社會＝國家を形成したと見る、あの社會契約說も烈しいそして正當な非難を蒙りつつあつた。たとへ

ば、イギリスにおいて一七一三年出版された "Characteristics of men, manners, opinions and times" の中で、著者シャフツベリー Anthony Earl of Shoftesbury は、人間は本來社會的の存在で、ずつと以前から社會の中で生活して來た、孤立した人間といふがごときものは單なる擬制にすぎぬ、もしかりに原始時代にかかる孤立的な人間の狀態がありえたとすると、それはわれわれが今日「人間」といふ名のもとに理解するものとは似ても似つかぬものでなくてはならぬ、それは言葉も知らないし、われわれが今日人間なる概念のもとに理解してゐる本能や特性の殆ど何物も持たぬ、全然異つたものでなくてはならぬ、なぜなら、これらの本能や特性は社會的影響の所産であるからと。フランスにおいても契的說はジョージ・ルイ・ブュホン George Louis de Buffon モンテスキュー、マーブリー・コンディリヤツク Mably de Condillac ヴォルテール、ニコラス・ランゲ Nikolas Linguet 等によつて强硬な反對を蒙り、モンテスキューのごときは「人間が社會を形成せず、お互に分離し、ある人が他の人を恐れて逃げてゐるとしたらば、むしろこの分離の理



由を探求せねばならぬ。然るに人間は生れながらにしてお互ひに結合せられてゐる。息子は父の所で生れてそこに止まつてゐる。それが社會であり又社會の原因である」といつて嘲笑的に皮肉つてゐる。

具體的な歷史の研究、外國旅行者や宣教師等の報告による原始民族に關する人類學的知識が增加するに從つて、この自然法學說や社會契約說は徐々に維持されがたくなつた。そして漸次、人間は本來社會的の生物であること、その社會は變化・發展するもの、その社會の變化・發展にともなつて、法律等のごときものも變化するものであるといふ思想が、當時の思想家だちの頭腦に、あちこちに形成されはじめていつた。

ここに社會發展の思想が明確に現はれ出した。そしてその發展の中に、一定の合法則性、必然性のあることも、漸次朧ろげながら模索されはじめた。

從來の敍述のなかにも、すでにこれまでも、それが精神であれ理性であれ、ともかくも發展の思想がどのやうな意味にしろとにかく既に存在したことは讀者も恐らく氣附いてゐ

られるところであらう。しかしその發展は、あたかも哲學上における當時の「自己運動」の觀念が、その核心において物を靜止・固定的に見る形而上學であつたと同じく、當時の發展の思想もその根柢においては、やはり形而上學であつた。卽ち當時の思想家たちは精神とか理性とかの發展を云々しても、本質においては精神とか理性とかを神又は自然より與へられた一定不變のものと見てゐるのであるからである。しかしながら、それがどの樣なものであるにしろ、とにかく發展の思想のあらはれてゐることは、當時の思想を中世封建社會の思想に對して、顯著に特徵づけるものである。なぜなら中世封建社會にあつては、その自然經濟にもとづく社會の停滯性に規定せられて、人間・社會等の進步とか發展とかいふ思想は、當時の人間の頭腦に宿りえず、進步・發展の思想がはじめて人間の頭腦に形成されはじめたのは、中世末期資本の發展による社會諸相の急速なる變革と、資本制覇の社會を人間の理想社會と希求するかの空想社會主義的幻想とにもとづく。

フランス大革命は、この社會發展の思想に對して、巨大な衝擊を與へた。發展の思想は



一層深く思想家の頭腦に刻みつけられた。僅かの歲月の間に、社會事情は一變した。舊き社會と新らしき社會との差異は、まざまざと人間の眼の前に現はれた。社會の變化・發展の思想は、一層に深く人間の心に根を張つた。

しかしながらその變革は、目指す理想を實現することなくして變革されたのである。革命家たちは失望した。しかしその一方において、「革命時代は單なる繼續的變革への過渡的段階にすぎない、それは必ずやその政治上並に社會上の理想を實現するであらう」と考へしめた。

ここにはじめて社會發展の必然性、合法則性の思想が登場してきた。卽ち、社會の發展は歷史的に條件づけられ、必然性をもつて進行する。一つの時代は前の時代の必然的な結果である。その必然的な過程を人間は勝手に變更することはできぬ。一切のものはみなその時を持つてゐる。

かかる思想をもつとも早く表明してゐるのはコンドルセーである。彼は言ふ「各瞬間の

出來事は、前の瞬間に起つた出來事に依存し、來るべき時代の結果に影響する」と。かかる發展の思想は、フランス大革命前後のイギリスの社會學者ファーグソンのうちにも强調的ではないが認められる。彼によると、ある發展段階は常に他の次につづく段階の前提條件を作り、その意味において後者は先行者の自然の結果だと見らるべきではあるが、しかしながら各々の時代はその獨特の傾向をもつてゐる、と考へられてゐる。しかし、革命を身をもつて經驗せるフランスの社會學者たちは、一切の社會發展は條件づけられた因果的の必然であるから、人間はそれを勝手に變更することはできぬことを强調し、從つて進步も誤謬も必然で、從來の發展過程において社會的誤謬が避けられたであらうと考へることは正しくない、人間の爲しうることはただ、この發展の必然性の法則を認識し、それに盲目的に導かれるかはりに、その發展の道程を明らかにして追從することである。といふ思想を附け加へる。

たとへばコンドルセーは、「人間の悟性を助長してそれを開發する眞理と同樣に、誤謬



も亦その活動の必然的結果である——彼が知つてゐるものと希望や要求が彼を促して向はしめるものとの間の、かの常に介在する誤れる關係の結果である。」またサン・シモンは、「何時の時代に於ても完成への發展は、最初天才的の人間に示され、それから民衆に依つて採用されたやうな道を辿つたことはない。それは事物の性質上全然拒否されてゐる。何となれば進步のより高い法則が一切を强制し支配してゐるから。この法則にとつては人間は單なる道具に過ぎない。この力は我々自身から導かれる。けれども、その影響から脫れるか或は其活動を支配するといふことは、我々の住む地球をして太陽の周圍を回轉せしめる原動力を勝手に變へることの出來ないと同樣に、もはや我々の力に及ばないことである。第二次的の作用が、我々の支配し得る唯一のものである。我々の出來る一切のものはこの法則（我々の眞實の豫見）に因果の認識を以て追從することである。この法則に導かれる代りに、この法則が我々に豫定した過程を明らかにしようとつとめることである。正しくこの點に——因に言ふが——現在に留保せられた大なる哲學的の進步が存するのである。」

("Organisateur")

社會發展過程の必然性への認識は、ついでその合法則性の探求に押しやる。かくてコンドルセーは社會の全發展過程を十の時代にわけ、サン・シモンはまたそれを大體において踏襲する。＊而して社會發展の合法則性の追究は、つまるところ歴史の科學的研究への方向である。オツトー・ブラウン Otto Brown の言葉をかりると「歴史を方法論上自然科學の方法に從ふ『法則科學』たらしめる」努力への方向である。("Geschichtsphilosophie") この故にコンドルセーは、自然科學的方法が歴史においても準備されむことを要求したのであつた。サン・シモン、コント A. Comte (1798—1857) においても、この態度は持續されてゐるが、しかしながら結局、これらのブルジョア・イデオローグには社會發展の内在的合法則性を解明する鍵が發見されなかつたが故に、ブルジョア・イデオローグによる社會＝歴史の科學的研究は、次いで十九世紀後半の社會生物學主義にその道を讓つたのであつた。



＊ コンドルセーの時代區分は、第一が人間が單なる家族群中に生活してゐた時代より共同團體（種族、村落等）の發達まで。第二が耕作の發生まで。第三は文字の發達まで。第四はギリシヤにおける獨特の科學の發達まで。第五はアリストテレスからギリシヤ、ローマの學問の衰頽まで。第六は十字軍まで。第七は印刷術の發明まで。第八はデカルトまで。第九はフランス共和制設立を經て一七九三年に至るまで。第十は結局十八世紀の社會理想を實現すると予想される時代。サン・シモンのもこれと大小同異である。

終りにフランス唯物論的歴史哲學者らの Klassenkampf の思想を附加しておく。

この時代にすでに階級に對する相當に深い洞察のあらはれつつあつたことは注目されなくてはならぬ。

社會現象を發生せしめる對立物として、中世神學的世界觀にあつてはキリスト教徒と非キリスト教徒とがあつた。十八世紀イギリスの哲學者にあつては、それは社會對個人、または衝動（あるひは感情）對理性となつて現はれ、同時代のフランスにおけるルッソオの思想には、それは一般意志 volonte generale 對特殊意志 volonte particulier となつて

現はれてゐる。ルッソオにおけるこれは、イギリスにおける社會對個人を言ひ換へたものにすぎないことは附說するまでもなからう。

しかしながらこの一方に、資本主義の發展は漸次社會は利害を異にした諸階級にわかれてゐるといふ認識に、當時の思想家を目醒まさしていつた。一般意志といふやうなものはありえないこと、また特殊意志一般といふものもありえず、個人はその立つ階級の性質によつて各自その利害觀を異にする、といふことについておぼろげながら氣づきはじめた。Klassenkampf の最高潮期——革命にあつては、そのことは一層明らかに人間の眼に現はれきたつた。

革命の經過において、次ぎ次ぎに勢力をえた何れの黨派も、自分たちが自分たちの立つ階級の「特殊意志」もしくは「特殊利害」を代表してゐるとは認めず、一般的な國民の意志、卽ち「一般意志」もしくは「一般利害」を代表してゐると信じてゐた。しかしながら各黨派の意見には、多大な逕庭があつた。そこで烱眼な思想家の眼には、漸次一般的利害



なる言葉は單なる擬制にほかならぬ、それは單にその黨派の立つ階級の特殊意志を代表してゐるにほかならぬ。卽ち各國民は各々特殊の利害を有する諸々の階級から成るといふことが明らかとなつてきた。

社會が富者と無產者との二つの階級より成るといふ認識は、すでに革命以前より存在した。そしてあるものは、その區別を單に財產の多寡におかずして、生產過程における利害の矛盾といふ觀點からとらへてゐた。例へばレーナールは、富者は同時に貧者の使用者であつて、貧者に雇役を强ひ、出來るだけ多くの貧者から利益を吸取せんとするに反し、貧者はできるだけ高い價格で勞働を賣るをいふことに利益を有する、と述べてゐる。しかし富者それ自身、貧者それ自身の內部にも、種々利害を異にする「階級」が存在するといふことは、大革命の經驗を俟つてはじめて明らかとなつてきたのであつた。

この認識をもつとも明らかに現はしてゐるのは、ジヤン・ポール・マラーである。彼は全革命を「種々なる階級のその特殊利益を貫徹せんための Kampf」として理解した。そし